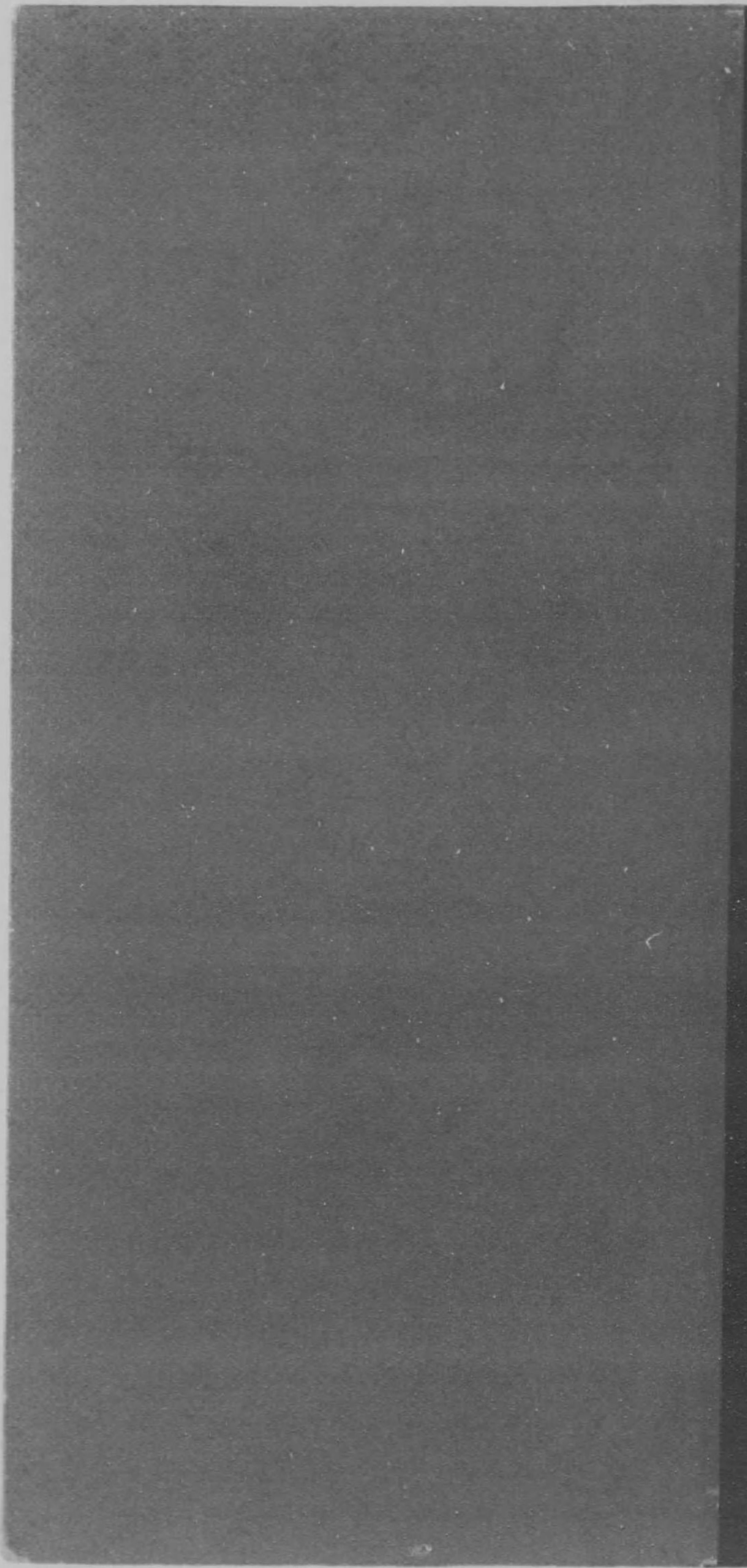


5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

396  
621

始





27.12.18



2-681

396-179



すね  
もの

青  
人  
友  
人

大正  
10. 8. 9  
内交



卷頭に一語

奇人と變人——それが何う異ふかなどといふことは論議するの要がない。奇人だからとて變人だからとて、何も人間社會からかけはなれた社會に棲んだものではない。矢張り人間の世の中に棲んで放屁もすれば放糞もする。或人からは馬鹿とも見えよう、或人には狂人とも思はれよう。そこが即ち興味あるところである。

要するに奇人、變人——それは其の時代に於ける一種の拗ねものたるを免かれない。普通人の千萬言にも優るものは拗ねものの一の沈黙である。拗ねもの



を馬鹿扱ひにする普通人なるものが馬鹿で、馬鹿扱ひにされる拗ねものが伶俐な場合が多い。そこが即ち面白いところである。

獨りよがりの伶俐者の多い今日、私が本書を著したのは決して故ないことではない。

著 者

もすねの奇人變人目次

俳諧寺一茶

- 一、我と來て遊べや親のない雀……………一
- 二、満座の侮蔑に平然……………四
- 三、狂氣じみた眞似……………九
- 四、放埒と破門……………一三
- 五、妻に愛想を盡かさる……………一九
- 六、子の死を聞いて慟哭……………二四
- 七、虱の放生會……………三三
- 八、追従の失念……………三九



蜀山人

九、拜領の時服を捨つ……………四

一、蜀山人の由來……………五二

二、一切書不申候……………五五

三、うすけせうく……………五九

四、蜀山人の禁酒……………六五

五、眞赤な河骨……………八〇

六、仍而壁書如件……………八三

七、反古紙……………八五

八、盆燈籠……………八九

九、竹に雀のなぐり書き……………九〇

一〇、縁起直しの狂歌……………九二

一一、蜀山人の辭世……………九八

一休禪師

一、前生は三疋の犬……………九九

二、發心の動機……………一〇九

三、幼年時の奇才……………一二七

四、執着の無い一休の横戀慕……………一二六

五、極樂の道程……………一三三

六、國守を懲しめる……………一三五

七、佛法は胸にある……………一四〇

八、糞を脱て梵天に捧ぐ……………一四一

賣茶翁



- 一、只より負け申さず……………一五一
- 二、窮樂と賣茶……………一五五
- 三、愛用の茶道具を焼く……………一五八

十返舎一九

- 一、膝栗毛で名盛を馳す……………一六二
- 二、蜀山人と一九……………一六五
- 三、債鬼拂ひの狂歌……………一七〇
- 四、賀客の禮服で廻禮……………一七三
- 五、放蕩者が放蕩者を預かる……………一七六
- 六、天麩羅の元祖……………一八三
- 七、舞ひ出した羽織の紋……………一八六
- 八、見た事も聞いた事も無いもの……………一九〇

- 九、死骸から火柱……………一九四

酒井抱一

- 一、抱一の放蕩三昧……………一九九
- 二、大名の若殿が生活難……………二〇四
- 三、吉原の遊女を根曳して宿の妻……………二〇八
- 四、碎けきつた抱一……………二二二
- 五、羽を伸す時節到来……………二二八
- 六、晩年の抱一……………二三六

子松山心

- 一、茄子の木に頼つた錢……………二三二
- 二、留守番と夜伽……………二三六



- 三、百姓娘の親切と歸參の悦び……………二三八
- 四、醜婦を娶つた源八……………二四二
- 五、斷食して死す……………二四九

### 曾呂利新左衛門

- 一、秀吉を馬鹿にした落首……………二五六
- 二、長曾我部は犬……………二六一
- 三、大きな狂歌と小さな狂歌……………二六五
- 四、猿の面が秀吉の面に酷似……………二七五
- 五、難句と將棋の必勝法……………二七九
- 六、一文倍増し……………二八七
- 七、あしを取り去る……………二九二
- 八、極樂世界我れに賜はれ……………二九六

### 乞食桃水

- 一、遊び道具は佛像……………三〇一
- 二、葵の花問答……………三〇四
- 三、燃ゆるが如き求道心……………三〇六
- 四、研鉢で麥春き……………三一一
- 五、有體に告白……………三二四
- 六、禪林寺を出奔……………三二五
- 七、師弟の邂逅……………三二六
- 八、乞食の雜炊……………三三二
- 九、佛像と狂歌……………三三五
- 一〇、桃水と知法尼……………三三九
- 一一、桃水酢屋を開業……………三四六



一一、桃水の遷化……………三五二

吉益東洞

一、萬病一毒を提唱……………三四

二、脈を診る手で泥捏ね……………三五七

三、お情食祿は頂戴せぬ……………三六一

四、國士の風をそなへた東洞……………三六六

三井親和

一、親和染めの由來……………三七一

二、藥師を觀音に鑄直す……………三七四

士道軒榮山

一、佛像經典を賣つて酒色に耽る……………三八三

二、口がある舌が動く……………三八六

三、嫌なものは坊主と女……………三八九

僧契沖

一、菅神の靈夢……………三九三

二、水戸義公激賞す……………三九六

岩佐京傳

一、長唄も書も駄目……………四〇一

二、草双紙の獨り舞臺……………四〇四

三、押かけ嫁御……………四〇七

四、京傳の商賣氣……………四一〇



- 五、勘定は頭割り……………四二六
- 六、京傳にも此の惻隱……………四二〇
- 七、丸藥の發明と遊興費……………四二五
- 八、玉の井を落籍……………四三九
- 九、京傳の死と女房の發狂……………四三五

松岡 恕庵

- 一、驚く可き記憶力……………四三八
- 二、蠟燭の屑を鬢つけの代用……………四四二

尾形 光淋

- 一、光淋の好尙……………四四七

二、金泥の竹の皮を大堰川へひらく……………四四九

尾形 乾山

- 一、兄光淋を凌駕する腕……………四四五
- 二、拜領の小袖で泥仕事……………四五六

佛 佐吉

- 一、佐吉の正直……………四六〇
- 二、山賊に快く金品を與ふ……………四六四
- 三、路傍の穀粒を拾ふ……………四六九

横 井 也 有

- 一、也有と俳席の掟……………四七四
- 二、ちやうぐわつが來た……………四八〇



三、晩年と辭世……………四八二

鐵翁和尙

一、墨壺の恣で畫の稽古……………四八八

二、蘭を畫いては神技……………四九〇

三、自然に拘泥せぬ鐵翁……………四九四

四、鐵翁と若侍……………四九八

五、若侍を訓戒……………五〇三

六、門弟の解放と入寂……………五〇七

望月三英

一、天下二名醫の一人……………五一

二、醫は仁術である……………五二七

欠



# 欠

## 瀧澤馬琴

- 一、小君の無謀に憤慨……………五七七
- 二、京傳に舌を捲かした處女作……………五八一
- 三、馬琴の氣質……………五八五
- 四、馬琴の後悔……………五九一

## 英蝶

- 一、三宅島へ流謫……………五九六
- 二、涙ぐましい程の孝心……………五九九
- 三、赦免の喜びと逸話……………六〇三

## 白隠禪師

- 一、説教を聽いて胸を痛めた……………六〇八



- 二、天神様を信仰……………六二一
- 三、白隠の無常観……………六二五
- 四、専念行者に教へらる……………六三二
- 五、一刀を提げて河を渡る……………六四〇
- 六、大暴風雨の中を大駢……………六三三
- 七、白隠の酒脱……………六三九
- 八、大呼一聲の示寂……………六四一

左 甚五郎

- 一、竹笠の水仙が百兩……………六四六
- 二、三井の大黒……………六五二
- 三、遊女屋で海老を彫る……………六五九
- 四、神技に達した甚五郎……………六六四

榎本其角

- 一、困った者……………六六五
- 二、其角の逸話……………六六七
- 三、俳句で雨乞……………六七一
- 四、一生の終吟……………六七四

澤庵和尚

- 一、和尚の略歴……………六七六
- 二、釋迦の尻嘗め……………六八一
- 三、他人は女房になれぬか……………六八四
- 四、悟りなば頭を剃るな……………六八八
- 五、澤庵漬の名の起り……………六九四
- 六、死にともない……………六九八



### 中井櫻洲

- 一、偽つて貰つた見舞……………七〇二
- 二、一計を案じて刺殺を免る……………七〇四
- 三、乗つた人より馬が丸顔……………七〇五
- 四、芳川顯正に一杯喰はす……………七〇六

### 中江兆民

- 一、尾行警官を捲く……………七〇九
- 二、借りた金を香奠……………七一
- 四、居士の強い信念……………七二
- 四、兆民の経歴……………七二三

### もすの奇人變人目次終

## 奇人變人

### 俳諧寺一茶

#### 一 我と來て遊べや親のない雀

一茶は北信濃黒姫山の麓に近く、芙蓉湖に臨んだ山水明媚の地、上水内郡柏原驛在の百姓、彌五兵衛の長男として生れ、通稱を彌太郎と呼んでゐるが、幼い、まだ物心もつかないうちに生みの母に死なれた。彌五兵衛は後妻を迎へたが、其の女は非常に邪慳な女であつた。それがためには、可哀想に彌太郎は随分苦しんだ。其の



上不幸な事には、彌太郎は儂尙で跛の醜い姿であつた。

「親のなれ子は何處でも知れる、爪を唾へて門に立つ」これは彌太郎が腕白な朋輩から浴びせられる悪口であつた。「親のない子」として、彌太郎は遊び仲間にも入れられず、爪弾をされて、いつも一人ほつちであつた。裏の畑に木萱など積んだ蔭で、不具の身を悲しみつゝ長い日を暮した追憶を「我身ながら哀れなりけり」と、後日其の文章にもものこしてゐる。

我と来て遊べや親のない雀

とは、彌太郎が六歳の時に、初めて口吟んだ句であるが、此の坐ろに出た句を見ても、如何に母親のない身を憐んだか、如何に繼母のために苦しめられたかを窺ひ知ることが出来よう。

彌太郎は七八ツの頃から、中村利爲の郷塾に入つて、読み書き算盤を習ふ傍ら俳諧を學んだ。利爲は通稱を六左衛門、俳名を新甫と號して、先代利信が加州の藩士藤田某に俳諧を學んだ其の餘流を汲んでゐたので、彌太郎に非凡の俳才のあるのを見抜いて、其の手ほどきをしてやつた。

「何だ、百姓の子が生意氣だ。百姓は田を作つたり、畑を打つたりする事さへ知つてりやア好い」と怒鳴られ怒鳴られ勉強した。そんな風である上に、家が貧乏なために、筆紙を求めることなどは、とても及びもつかぬことであつたので、彌太郎は叱られ毆られしながら、爐の灰と、道端の砂を、掻きならし掻きならしては手習ひをした。彌太郎は不具な身體で、晝間は野良の仕事を手傳ひ、夜になると草履や草鞋を作つた。さうして家人が寢についてから、そつと起き上つて書物を讀んだ。



或る夜の事であつた。彌太郎は兩親の寢息を窺つて、そつと起きあがつて燈火を點けて書物を読みはじめたが、折悪しくも偶と眼を覺したのは繼母であつた。見ると彌太郎が起き上つて、燈火を點けて書物を読んでゐるので、

「何だ汝は、夜半に起きあがつて書物なんか読んで、餘計な油を使ひやがる。」と云ひざま、彌太郎を引き摺り倒して打ちのめした。其の後も然ういふ事は決して珍らしいことではなかつた。けれども彌太郎は、少しも懲りずに勉強をつゞけた。泣きながら手習ひをした。書物も讀んだ。

## 二 満座の侮蔑に平然

其のうちに一茶の彌太郎は其の師利爲を亡つたので、更らに堀德輝の門に入つた。德輝は肥前大村の浪人で、經典に通じ、辰月庵若翁と號し、老莊の學をも極め、俳

諧は正風の流れを汲んで桃園と云つて居た。それは芭蕉の桃青に因んでつけたのだつた。此の人は柏原の土になつた人で、姥捨山の觀月堂に「姥捨や姥かゆかりの尼一人」の句が残つてゐる。

一茶は此の門に入つて、専念俳句を學んだが、それがためには繼母の憎しみは一層増した。

「汝見たいなもなア、家に居ても何にもならねえ。親の嫌えなものがどうしてもしたかつたら、何處さへでも勝手に出て行つて爲るが宜え」と、遂ひに十四の歳に家を逐ひ出されて了つた。

若翁は一茶の境遇に同情して、情ある言葉をかけて呉れたので、二年ほどは内弟子として厄介になつて居たが、十六歳の時に、意を決してとほ／＼と、江戸表をさ



して旅立つた。勿論知己もなければ、學資もなかつた。けれども唯一の頼みとするのは、師の若翁から貰つて來た、某といふ儒者に宛てた添書であつた。

一茶は其の儒者の家に、下僕となつたり、または聖堂の小使ひを勤めたりして、忙がしい間にも、ひそかに講義を立ち聽きして、苦しい學びの道を辿るのだつた。

天明末の八月の事であつた。向島の其日庵素丸の庵で觀月の句會が催された。素丸は葛飾派の家元で、其の頃名ある宗匠であつた。一茶はかう云ふ席に列なるのは初めてであつたので、隅の方に小さくなつて居た。

一茶の醜い不具な姿の上に、粗末な風をして居るので、逆も俳人といふやうな風流人には見えなかつた。人々の侮蔑の視線は、隅の方に小さくなつてゐる一茶の上に注がれた。

「何だい、お前さんは？ お前さんも句を吟みなさるか。」と、にや／＼笑つて訊いた。

「へい、ほんの眞似事ばかりでございます。」

一茶は謙遜してかう答へた。

「なるほど、眞似事といつても、俳句といふものはなか／＼難かしいものだが、どうだ、此の名月を見て何か吟んだものがあつたら見せて貰ひたいものだが……」

「まつたくの初心ものでございまして、お目にかけるやうなものは逆ものことではないですが、お笑ひ草までに一句詠んで見ませう。」

一座のものは、此の醜い、汚らしい佝僂の跋に、お笑ひ草にも何にも、何が吟めるものかと、クス／＼笑つてゐた。



一茶は別に首を傾けるまでもなく、筆をとると手近にあつた短冊へ「三日月の」と認めた。一つ笑つてやれと思つてゐた一座のものの一人が、これを覗いて、  
 「三日月のか、なるほど初心ものだ。」「あは、は、は、ほんとうのお笑ひ草だ。」「これぢやア月まで笑つてらア、あは、は、は、は、は。」「三日月はよかつたね。」と、一座は哄と笑ひ轉けた。

けれども一茶は平氣なもの、其の下へ持つて来て、「頃より待ちし今宵かな。」と一氣に書いた。

「何だつて、一息に讀んで見なきやア判らない。」と言ふ。

「三日月の頃より待ちし今宵哉……でございます。」

一座は水を打つたやうに靜まりかへつた。それは句の打拙よりも、當意即妙の機

智に撲たれたのであつた。

「これは見込みがある。」と、宗匠の素丸は即座に門弟の一人に加へた。そして二六庵菊明の名を與へた。當時一茶は二十五六の若者盛りの時であつたので、本來ならは一座のものから哄と囃されて、後の句を吟むどころか、嚇と逆上して了ふのだが、平然と稱へて立派に句を吟んだところに、一茶の一茶たるどころか窺はれる。越えて二十八歳の時には點者に進み、其派では由緒ある竹阿の名跡を襲ぐことになつた。

### 三 狂氣じみた真似

一茶の名は漸く人々に膾炙して、苟くも俳句を娛しむもので、竹阿と云へば知らぬものは無いまでになつた。

一茶は三十二年、其の郷里に錦を飾つた。それは寛政六年であつた。さうして



妻を娶つたが、醜い不具者といふ事を承知で嫁いで来るには来たが、要するに彼の女は平凡な女だったので、妙にひねくれた、神経の過敏な夫に對して、眞の同情者であり、且つ慰藉者たることは出来なかつた。實家は繼母の腹に出来た弟が繼いでるたが、何も財産があるといふ譯でも無い家でありながら、常に葛藤が絶えなかつたので、故郷に歸つてからも、決して愉快ではなかつた。

けれども、一茶の悶々の情を慰めるものは、其の風流三昧であつた。それが一茶にとつては、唯だ一つの心やりであつたのだ。それで、氣が向けば用を足しに出かけた先から、家へも歸らずフイと遊びに行つて五十日も歸らないといふ風で、家事などは頓と顧みなかつた。炎天に布子を著たり、冬に蚊帳を著て寝たり、床の間に便器を置いて澄まして居たり、坐ながら小便を垂れ流して、平氣で始末をさせるや

うな、狂氣じみた眞似をしたのも、悶々の情を捨てるためだつたのだ。

斯んな風で、故郷に居ても面白くないところから、享和元年の頃再び江戸にふらりと出て來た。併し其の時は、引き立てて呉れた素九は歿して、白芹といふ門弟が其の跡を繼いで、其月庵を名乗つて居た。旋毛の曲つだ一茶は、故と其處を訪ねないで、藏前の夏目成美の許を訪ねた。成美は井筒屋八右衛門と云つて札差であつた。

「俺は信州の竹阿と申すものぢやが、御主人が御在宅でござつたら、ちよつとお目にかかりたい。」と、成美の店に入つた。

一茶が入つた時、「乞食坊主が……。」と嫌な顔をしてゐた番頭は、一茶の穢い姿をジロリと見て、



「どんな御用ですか。」と愛想のない挨拶。

「別に用事といつてはござらぬか、同じ風流道に遊ぶもの、御高名を慕ふてお訪ねいたしたまでぢや。」「あゝさうですわい。折角ですが生憎と主人は、近頃病氣で寝てゐますから、取り次いでも迎もお目にかかることは出来ませうまい。」と云ふ、取り次ぎもしないでの計ひ。

「ほう、御病氣でお目にかゝれぬ？ それは誠に残念ぢやが、御病氣とあれば致し方がない。またお訪ねする事もあるか無いか分らぬ。恐縮でござるが、ちよつと料紙と筆とを拜借致したうござる。」「どうするんです？」

「お訪ね致したしるしに、一向残して置きたいと存じましてな。」と言ひながら、一

茶は筆をグツと噛んで、カサ／＼と硯を擦つて墨をふくますと、

信濃では月と佛におらが蕎麥

と認めて、

「では、恐縮ぢやが、これを後で御主人のお目にかけて下され。いや、飛んだお邪魔を致しました。」と其のまゝ店を出て、厩橋の方へ歩いて行つた。

#### 四 放埒と破門

「其處にお出でのお方、ちよつとお待ちなすつて下さい。」と、誰れやら後から走つて来たものが聲をかけた。一茶は自分のことか知らと振り返ると、

「若し、あなたが信州のお客様でございますか。」と訊いた。

「左様、俺は信州の乞食坊主ぢやが。」「それはどうも恐れ入りました。實は只今あ



なたがお歸りになつたから、主人にあなたが残して行きなすつたものを見せると、主人が朋輩のものを大變叱つて、飛んだ失禮をした。是非お目にかかりたいから、早く行つてお立ち寄り下さる様に、さう言つてお供申して來いといふ事でございませうから、どうぞ御迷惑でもござりませうが、お引返しなすつて頂きたうございますが……」と、氣の毒相に言つた。

「なるほど、いや却つて痛み入りました。もとよりお目にかかりたくてお訪ね致したのでござるから、何度でも引返します。」と言ひながら、一茶は變な面一つせず踵をかへした。

一茶は一室に案内されて、初對面の挨拶をする。成美は店の者の無禮を詫びて、「よくお訪ね下された。」と悦んだ。

成美は若い時分から、脚を病んで起居さへも自由でなかつた。それで自ら不隨齋と號して居た。成美が不具な一茶に同情したのも決して故ない事ではなかつた。同病相憐む測隱の涙は成美の双の瞼を濡らした。

「どうか、こんな家でござるが、何時までも御逗留下さい。あゝさう、話はあとで緩々出来る。先づ湯にでも入つて、旅の疲れを休めなさるがよい。」それは忝けない。湯と言へば、もう忘れるほど入つた事はござらぬ。「はゝゝゝ綺麗な風呂ではござらぬが、錢湯のやうに込み合ふこともござらねば、悠くりとお入りなさるがよい。これよ、誰れか湯殿に御案内してお上げな。」

札差の成美の家は、固より裕福であつたから、毎日風呂は自分の家にたつてゐた。



一茶は暫くしてから、

「あゝ、どうもお蔭ですつかり致しました。まったく何ヶ月目に入つたか、一遍に垢が落ちて、何となくかう身體が軽くなつたやうな氣が致します。あゝどうも。」  
如何にも仲々としたといふやうな風に湯からあがつて來た。

「いや、湯といふものはなか／＼好いものでな。」と言ひながら、ひよいと一茶の顔を見ると、どうしたのか青や赤やの、いろ／＼な斑が、ちやうど隈取のやうに染みついてゐたので、成美は思はず噴飯した。

「はつ／＼／＼、どうなされた。」はて、何が其の様に可笑うござるかな。」と、平氣で居るから、成美の方では尙ほ可笑しい。

「はゝゝゝゝ、まア鏡を見なさるが可い。」鏡なぞといふものは、遂ひぞ見たこと

がござらぬが、一體どうしたといふので……。「湯に入つて何をして來なすつたか顔ばかりではない、見なされ、両手にまで其のやうな青や紅の斑點が……。」と言はれて、一茶も驚いた。

「吁、なるほど、これは大變。」「どうなされた。」「はゝゝゝゝいやこれはどうも、あつ解りました解りました、實は湯から上つて身體を拭かうと思ふと、つい手拭を忘れて出たので、取りに入るのも面倒と思ひましたから、袂にあつた此の風呂敷で間に合はせたので、この色が移つたと見える。」と、袂から平氣で汚れた更紗の風呂敷を取り出して示した。

其の無頓著さには、流石の成美も腹の痛くなるほど笑ひもし、また呆れもしたが一茶としては斯ういふ事は、決して珍らしいことではなかつた。



一茶は成美の情で、其家に足を留めてゐるが、間もなく下谷坂本に家を借りて、不自由な身で不自由な一人暮らしを始めたが、それは他から見ると、自分自身では、故郷に居て不愉快な日を送つて、自分を解せぬ女房の侮蔑半分のがみくを聴いてゐるよりも、どんなに呑氣であつたか知れなかつた。

盗人が入つても、これぞと云つて持つて行くやうなものもないが、氣が向けば夜半でもづろりと飛び出して、其處らをろつき廻る。晝間でも絶えず四方を遊び廻る。家に居ても遂に兩戸を開けたことがない。眠たければやる。食ひたければ喰ふ。

或る時他が、

「あなたは一人暮らしだといふが、さうして出歩いてゐるなさは、戸締り位はして

ゐなさるか。」と訊いた時、

柴の戸や錠の代りに蝸牛

と吟んで示したので、其の放埒に呆れかへつた。

一茶の放埒は、其の常住の行ひばかりではなかつた。口吟むところの句も、自由奔放、勝手氣儘で、とても葛飾派などの人々と相容れよう筈がなかつたので、白芹の名で「一派の規矩を紊るもの」と云ふ名目で、遂に破門されて了つた。破門されても、それを苦にするやうな一茶ではなかつた。寧ろそれを好い事にして、自ら號を一茶と改め、庵を俳諧寺と稱して、益々自由氣儘な句を吐いてゐた。

##### 五

妻に愛想を盡かさる

「おや、今日は珍らしくお在ぢやな。」と手箒を持つて入つて來たのは、隣家の婆さ



んであつた。一茶は薄暗いところから、

「やあ、婆さんか、何か用かな。」「否え、お留守なら掃除でもして置かうと思ひまして。」「さうかえ、まああがつてお茶でも飲みなされ。」「へえ、それはまたない事、今日は湯が沸いてるますかへ？」「なアに、沸いてるないから沸かして貰はうと思つて。」「おほムムム大方そんな事だらうと思つてゐましたよ。時にどうですな、たまには雨戸でもお開けになつては。」「いや、俺は明るいのは厭いぢや。」「でもさうやつて晝間でも燈火を點けて置くのは、第一油が費えですよ。」「其の代り、かうして置くと、人が來ても煙草の火の心配がない。」「なるほどねえ、いやはやどこまでも變つてゐなさる。」

一茶は年が年中雨戸を閉てつ切りにして、白晝でも行燈を點けて居た。そして燈

心がなくなると、財布から小錢を取り出して、油皿の中へ入れて置く、すると隣家の婆さんがそれを役得で、不在でもかまはず一日隔きにはやつて來て、燈心をちやんと入れて、そこらを掃除して、汚れものなどを洗つて呉れるのだつた。然うして呉れたからと言つて、口の先きで「有り難ふ」と云ふのでもなければ、「御苦勞」と一言禮を言ふのでもなかつた。

來客でもあると、飯時分になると近所の飯屋に一緒に出かける。來客を連れて行くのだから、勘定は一茶の方であるかと云へば然うではなく、飲み食ひは一緒にしても、勘定は各々割前にして拂ふのであつた。

さうして暮してゐるうちに、或る日故郷の柏原から飛脚が來て、恩師若翁の訃を齎らした。



此便り聞くとてある夜一時雨

と吟んで、直ぐ様故郷に戻つて、師の墓に詣でた。其の時の手向の句は、

夕暮に土と變るや散る木の葉

といふのであつた。

久し振りで我家に歸つた一茶を捉へて、妻は掻き口説いた。一茶も情につまされ

て、  
「それでは江戸に連れて行かう。さうして旅の苦勞をして見るが可い！」「行きま  
すとも、お前さんの行くところなら、何處へでも行きますよ。一人で貧乏世帯を張  
つて、子供を育て、行く苦勞より、どの位宜いか知れますまい。」と云ふので、今度  
は妻を伴つて江戸に出た。そして本所番場に家を借りて住んだが、素より妻や子が

あるからと云つて、一茶の性行に變化を來すやうな事はなかつた。

一茶は相變らず、明日の米にも困つても構ふことはない。氣が向けば歸るが、さ  
うでなければフラリと出たまゝ、一年も二年も行脚に出て歸らない。さうなつて見  
ると、妻は見も知らぬ江戸にゐるよりも、田舎に居た方がどの位樂だつたか知れな  
いと後悔した。逆ものこと、窮苦に堪へられなくなつた。

「とてもお前さんと一緒にゐたのでは、一生浮ぶ瀬がないから、私に暇を下さい。」  
と言ひ出した。

「さうか、厭になつたものを、引き留めて置いても仕方があるまい。勝手にするが  
可い。」「それでは、女の子は私が連れて行くから、男の子はお前さんが育てて下さ  
いよ。」「いっ。」



男の子といふのは、名を混藏と呼んで、生れて而かもまだ間もない嬰兒であつた。

「さア、話がさうと極つたら、出て行きますから去狀を下さい。」「よし、今やるから待て。」と言ひながら、一茶は筆をとつて、

糸瓜蔓切つてしまへばもとの水

の一句を認め、

「さア、これが去狀だ。持つて行け。」と云つて投げ出したが、さすがに一茶の顔には言ふに言はれぬ淋しさがあらはれてゐた。母を離れると直ぐ嬰兒は火のつくやうに泣き出した。

## 六 子の死を聞いて慟哭

乳がなくては、一日も育つて行かない嬰兒をのこしてゆかれた一茶は、「去りし女房の遺品とて、行燈にのこせし針のあと、泣き入る幼児抱きしめ、男涙に貰ひ乳」の、二上りの文句のそのやうに、流石の無頓着の一茶も、嬰兒の飢ゑて泣き叫ぶ聲を聴いてはじつとしてゐられなかつた。坐ながら小便をするほどの一茶も、不具な身に、泣き叫ぶ嬰兒を抱いて、貰ひ乳をして歩くのであつた。

「あなたは、どうでせう。お國元にでも連れて行きなすつたら、乳のある人で、世話してやらうと言ふ人でもありさうなものですから、若しそんな人でもあつたら、お預けになつちや如何ですな。」

と、近所の妻君に言はれて、一茶も其の氣になつて、嬰兒を抱いて遙々と故郷の柏原をさして戻つて來た。



柗原在赤澁村の百姓に富右衛門といふ者があつて、其の女房が子供に死なれて、乳が出て困つてゐるので、里子を欲しがつてゐるといふ事を聞いて、一茶は直ぐ様富右衛門の家を訪ねて頼んだ。

「まアお氣の毒な。やれ／＼可愛いお子様ぢや、宜しうございますだ。俺も嫁も人から笑はれるほどの子煩悩でけすから、決して御心配は要りましねえ。大切にお育て致しやすよ。」と、快く引き受けて呉れた。一茶も悦んで、貧しい中から、分には過ぎた養育料を與つて、

「やれ／＼、それで俺も安心しましたぢや。」と、重荷でも下したやうに、ほつと安心の息を吐いて江戸へ歸つた。

けれども、事實は決して一茶が安心するやうな夫婦ではなかつた。乳が出るとい

ふのは眞赤な偽りであつた。唯だ仕送りが欲しさに、乳があり餘つて困るなどと、作り言をかまへて、目的は唯だ愆一方にあつたのだつた。

それで、他人の見る前では、如何にも乳を呑ませてゐるやうに、混藏の顔を胸のところによづめさしてはゐても、遂いぞ乳房をふくましましたことはなかつた。飲ませるものは、粥湯と湯水ばかりであつた。混藏は腹ばかりは大鼓のやうに膨れてゐるが、身體は日に日に痩せ衰へて、遂ひには劇しい下痢を起して、哀れにも死んでしまつた。

江戸で、此の報知を聞いた時、一茶は聲さへ出ないほどの悲嘆に暮れた。

撫子や地藏菩薩のあとさきに

と吟んで、夜も日もなく、前後不覺に泣き沈んだ。



一茶は悲しみながら故郷に歸つたが、混藏が死に至つた真相を聞いた時、一茶は身を震はした。齒を喰ひしはつて泣いた。子供の時から冷たい世間に泣いて育つた一茶は、幼いものに對しては、其の他人であらうとも、殊に深い憐憫の情を有してゐたので、富右衛門夫婦の、鬼とも蛇ともたとへ様のないやうな慘忍を聞いては、口を極めて罵らずには居られなかつた。

乳戀しちゝこひしとや蓑蟲の、泣き明しけむなき暮しけむ

もの言はぬ幼の口を赤澁の、水の責とは鬼も知らじな

と吟んで、自らの髪の毛を撈つて、富右衛門夫婦を信じた自分の輕舉みを悔いた。

一茶は風流の外に佛典を學んだ。佛の大慈大悲に隨喜の涙を流した。其の心はやがて禽獸草木の上にも及んで、明窓寺の幼兒鷹丸が、芹摘みに出て橋を踏み外し、

雪解のたみに溢れてゐた水に押し流されて、敢なくなつた時の如き、あだかも我が子が此の非業の死を遂げたかのやうに嘆いて、

思ひきや下崩急ぐ若草を、野邊の煙になして見んとは

と吟み送つて、其の親と共に泣いたのだつた。

また親鴉が其の子をとられた、始終其の家の棟に啼いてゐた。それが哀れだと言つては、

子を思ふ闇やかはゆいくと、聲をからすの鳴き明すらむ

と吟み、また同じやうな情で、

鹿の親笹吹く風に戻りけり

とも吟んだ。



野邊の若草の憐れを見ては、

長々の年月、雪の下に忍びたる露、蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て、雪間々々を嬉しげに、首さしのべて此世の明り、見るや否や、ほつきりと摘切らるゝ、草の身になりなば、たか丸法師の親の如く、悲しまざらんや。ともものしてゐる。

瘦蛙負るな一茶こゝに在り

最負目に見てさへ寒き素振哉

罷出たるは此藪の臺にて候

目出度さも中位なりおらが春

野の苔も花咲く世話を手に梟

などの句は、何れも一茶の爲人を遺憾なくあらはして、後人に膾炙して居る。

文化十年、恰かも十三年振りで郷里へ歸つて住む事になつた。さうして永年ゴタ／＼の中心となつてゐた、實家の財産——財産と言つても取り立てゝ言ふほどのものはなかつた——それを盡く腹違ひの弟に遣つて、身分の身には一物もつけなかつた。

「あの偏屈な彌太郎にしては珍らしいことだ。矢張年をとると、自然氣も折れると見える。」と郷里のものは言つた。そんなことを聞いた一茶は、

「人の心も知らないで、餘計な事を言ふものではない。俺が頑張つたのは、何も僅かな身上に目をくれてでは無かつた。俺は惣領としての務めを行つただけだ。」と言つた。それはまったく一茶が後で附け加へた體裁の言葉ではなく、眞實の腹であつ



た。

## 七 虱の放生會

郷里に歸つても、一茶の暮しには洗ふが如き貧乏はつき纏つてゐた。門人や知己は氣の毒に思つて、米を贈り、鹽を與へ、また時々小遣錢の如きも貢いだ。尙ほその外に、汚れ放題、破れ放題で、更らに本人が構はぬ衣服の如きも、春秋には新調して贈つた。

或る時であつた。一茶は新しい布子を着て歩いてゐた。一茶としては實に珍しいことで——處が其の据の方から、眞白な綿が喰み出して居つた。

「おやく、彌太郎どん、衣服を見ると新しいやうぢやが、裾の方から綿が出てゐるが、どうさつしやつた？」

途中で逢ふた知己の一人は訊いた。

「は、ムム、これかな、これは連中から拵へて貰ふたのぢやが、今日着て見ると、折角のことに丈が長かつたので、茶切り庖丁で切つたのぢや。長いものには巻かれろといふが、着物の長いばかりは煩さいものぢやでのう。」

一茶の此の答へに、相手は呆れて、二の句もつけずに行き過ぎて了つた。妻を糸瓜と思つて去つて了つた一茶も、其の後再び後妻を迎へたが、間もなく一人の娘が出来た。六十にも近い老いの子だから、可愛さはまた一しほ、さとと名をつけて手のうちに入れてまるめる程に慈しんでゐたが、よくよく子に縁がなかつた一茶と見えて、二歳までも育てて、此のさとも瘡瘡のためにとられて了つた。

一茶の嘆きは一通りではなかつた。其當座は毎夜々々、焼毘場の邊をうろついて



「親も来た處ぢや、子もこゝへ来た、靈が残つてゐるなら、逢ひにござれ、逢ひに來て呉れ。」と、物狂はしく泣き叫んだ。

間もなく、其の娘の母にも死なれて、一茶はいよく一人ほつちとなつた。其の老ひるきは益々寂しいものになつた。

次ぎの年の八月のことであつた。月を見て、

小言いふ相手もあらば今日の月

と吟んだ。如何に孤獨の哀愁に泣いて居たかが分らう。

或る時であつた。相原の名主嘉右衛門が、あはただしい風をして俳諧寺を訪ねた。

「彌太郎との、お在宅かな。まア〜何をしてござらつしやるだ？」と、入つて見

た名主は一茶の爲てゐることに膽をつぶした。

「これは、誰人かと思へば、名主殿かな。どうも暖かうて結構な天氣ぢやの。」

さう言つて一茶は、相變らずほかくと暖い日面りで、古布子を擴げて虱取りに餘念もなかつた。

「天氣の好いのは分つて居るが、此方はまア何といふ装をしてござるだ！」「お見かけの通りぢや。大概までは我慢をして置いた。これも血を吸すわば疲せよう。生きて居られまいと思つて、ぢやが、だんだん増長して、見て下され、此縫目が眞白になるまで子を生みつけて、子々孫々、寄つてたかつて攻めたてる、あまり増長してやり切れなくなつたので、今日は大きいところの祖先だけでもと思つて、今放生會をはじめたが、裸ではまだ寒いので、ちよつと着替に欄を引張し出したところぢや。」「相變



らす此方のする事は變つてゐる。ぢやが、虱を一體どうしてござるだ？」「生あるものを捻り潰すのも可哀想ぢや、それかといふて其處らへ打つちやつて置くと斷食のために死んで了ふ。そこでかうして柘榴の樹へ這はしてゐるところぢや。」「はてな、其處らに打つちやると斷食で死ぬと言はつしやるといふて、柘榴の樹に這はせるといふのは？」「はてさて名主ともあらう者に似合はぬ物を知らぬ人かや。柘榴の實は人間の味があるといふではござらぬか。明窓寺の説教にもよくあることぢや。人の子を喰ふ鬼の母に、お釋迦様がお授けになつたとか、その鬼子母神の由來から思ひついたのぢや。

我味の柘榴に這はす虱かな

それ見さつしやれ。のほるはく、行列を作つて登つてゐる。」

名主嘉右衛門は、開いた口が塞がらなかつた。と、我れに返つて、

「おゝく、それどころぢやないわ。大切な用事で來たのぢやつた。これ彌太郎殿、俺と一所に早く本陣まで來て下され。」「本陣まで、ほう、して何の用でかな。」「大切な用事ぢや。外でもない、加賀様參觀の御途次、當宿へお泊りなされたが、此方の風流とやらを聞召されて、是非とも此方に逢ふて、其の俳句とかを見たいと仰せられて、此方に目通りを仰せつけられたのぢや。偉いもんぢやござらぬか。彌太郎殿、此方は果報ものぢやの。何と有り難い事ではござらぬか。」と、他人事ながら顔の相をくづして言つた。

一茶は鼻の尖で、

「ふゝん。」と笑つて、「折角ぢやが、まづ御免を蒙むらう。」「えつ、まア此方は何を



言はつしやるだ。加賀様が目通りを仰せ付けられたのに。「加賀様だかど様だか知らぬが、そんなものは風流に用はない。また面目にする俳諧もござらぬ。宇宙萬物、俺はさうした御用で俗化されて了ふのが大の嫌ひぢやわい。」と突つ放した。呆れかへつたといふ様な顔をして居た嘉右衛門は、暫しは取りつく島もない風であつたが、偶と考へた。これは欺すに如くはない。

「いや、それは俺が悪かつた。遂ひ言ひつけて居るものだから、御用と言つたが、實は加賀様から入懇のお招きぢや。俺の所へ加賀様から態々御使ひを下されて、直接に使者を立てては却つて迷惑であらうから、俺からさう言つて、懇に同道して呉れとお頼みぢや。此方の氣心はよう知つてゐながら、遂ひ何時もの口癖でな、若し此方が来て下さらぬと、俺の腹切り仕事ぢや。一つ機嫌を直して、一寸でも宜

いから顔を出して下され。」と下手に出た。

「はてさて、安つほい腹ぢや。ぢやがそれほど言はつしやるなら、お前の面立てに同道ませう。」「やれ、有り難い、それで安堵しました哩。」

加賀侯の目通りへ出るのだから、切めて綿服でも、垢のついてゐないものと着かへるかと思ふと然うではなく、虱を放生しきらない古布子を引っかけて、

「さあ同道ませう！」と立ちあがつた。嘉右衛門は一茶の服装を見て困つたといふやうな顔をした。

#### 八 追従の失念

一茶は名主同道で出かけた。途中で名主は言葉を卑ふして、

「御迷惑ぢやの、御迷惑序でにいま一つお願ひがありますぢや。他でもござらぬ。」



何といふても先きは百萬石の殿様ぢや。此方の氣象では厭ぢやらうが、其處を一つ我を折つて、機嫌取りにお世辭の一つも言つて下さるまいか。」

一茶は如何なる下卑下郎でも、決して卑しめることはなかつた。其のかはり、また如何なる高位高官でも恐れることはなかつた。仕度いまま放題をして、平然としてゐるのが性分であつた。頼まれても世辭などの言へる男ではなかつた。

「これはまた異なおたのみぢや。ぢやが、外ならぬ名主殿のこと、思ひきつてやりませうわい。」いや、それを聞いて安心した。何時も其のやうに素直だと、此方も善い人ぢやがの。」

「はゝゝゝお前様も、いつも其の様に腰が低いと、善い名主殿ぢやがな。」言ふことは皮肉であつた。やがて一茶が柏原の本陣に来て見ると、梅鉢の紋を打

つた幕を張り廻し、盛砂に打水、高張提灯、堂々百萬石の威を示してゐた。

一茶は恐れる氣色もなく、佝僂で跛、其の上徹衣垢面、嘉右衛門に玄關で別れ、

案内の家來のものに伴はれて、平氣で前田侯の前へ出た。前田侯は存外打ち寛いだ體で、一茶を引見した。

「其方が一茶か。能う參つた。豫ねて風流の名は聞いて居るが、治體俳味とはどんな事ぢやの？」

一茶はグイと一膝進めた。

「俳諧の道は孔釋の道と同じでござる。今の俳諧を云ふものは、唯だ題を得て發句を作るだけの事、到底共に談ずるには足りませぬ。」左様か、然らば其方の俳諧は何うぢやの。「山水風月、皆是れ俳家生涯の事でござる。心の赴くままに發するの



が、即ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃かでござらう。尸位素餐の輩に、眞の俳諧など解るものではござらぬ。」

傍若無人の放言に、列居る家來もはツと思つた。前田侯はかへつて微笑みながら、「齒に衣著せずよく申した。聞きしにまさる其方の器量、予は其方の意氣が氣に入つたぞ。」

「恐れ入りまする。」「これ、一茶に膳部を取らせよ。」「はつ。」

運ばれた膳部、一茶は何の遠慮もなく、放題に酒を飲み、氣儘に肴を喰つた。それから引出物として時服二領下された。一茶はちよつと考へて居たが、にやりと笑つて、

「有り難く頂戴致しまする。ではこれにてお暇を。」

「うむ、大儀であつた。」

一茶は退からうとして、ちよつと躊躇した。

「どうぞ致したか。」「はつ、大事な事を失念致しました。」「何ぢや。」「高貴の御前へ出たら、必ず追従を申して呉れと、折角名主殿に頼まれて参つたのに、頓と失念仕りました。改めてお世辭を申し上げます。」と、一茶は眞面に、額の汗を拭きながら低頭した。

「は、は、は、は、面白い奴ぞや。どうぢや、追従を失禮致した罰として、一句讀まぬか。」

前田侯の言葉は、畸人の一茶には氣に入つた。

「はつ、恐れ乍ら料紙と筆硯を……。」「うむ、誰そあるぞ、料紙と筆硯を持參せ



よ。

「忽ち一茶の前に、料紙と筆硯は運ばれた。一茶は筆をとつて、料紙に考へることもなく、

子供までのんのうと呼ぶ梅の花

と認めた。

前田侯はそれを見て、

「うむ、賞めつかはずぞ。」と斜ならぬ機嫌であつた。まつたく一茶としては、此の場合如才の句であつた。それも、前田侯の言葉が氣に入つたからで、それではなくは一茶の事であるから、どんな皮肉な句を吐いたか知れなかつたのだ。

## 九

拜領の時服を捨つ

上首尾で、而かも時服二領まで頂戴した。普通のものなら、手の舞ひ足の踏むところを知らないほどの悦びであるのに、一茶は別にうれしい様な顔もせず、寧ろ厄介なものを貰つたといふ様な面持で本陣を出た。

山海の珍味に、遂ひぞ口にしたこともない上酒を鱈腹胃の腑に溜めて、瓢々として菴室へ戻つた。菴室には師の一茶が前田侯に目通り仰せつかつたさうなと、悦びを言はうと門人たちが集つて居た。けれども各々師の變り者の事だから、無禮なことでも申上げて、ひよつとした事でもあつたのではないかと、ひそ／＼心配氣に話してゐた。其處へ一茶が戻つて來た。門人の誰れ彼れは駈け出して、

「お歸りなされませ。御前の御首尾は如何でございました。」普通のものに言はしたら、あれを上首尾と云ふぢやらう。「それは、お拜領物でございますか、



私がお持ち申しませう。」と門人が受け取らうとすると、一茶は其手を拂ひのけて、「いや〜、それには及ばぬ。」と言ひながら、何と思つたか、家には入らないで、ぐるりと廻つて背戸へ出ると、抱へてゐた拜領の時服を、崖下の田圃に惜氣もなくほんとは捨てた。見て居た門人たちは驚いた。

「もし、何をなされますか？」「なに、用のない衣服を捨てたのぢや。」「折角加賀様が下されたものを。」「それだから捨てたのぢや。初めつから貰つて來るのが厭でならなかつたが、貴人の前で辞退すると、あれ見よ、一茶は内心では欲しいが、故と無慾を街つて辞退をするのぢや。」と世上の口が煩いから、假りに受け取つたまでぢやつた。かうして下へば先きでも氣が濟めば、俺の氣も亦濟むのぢや。やれ〜安心した。さ、家へ入らう。遊茶でも呑みなされ。」

振りかへりもしないで、さつさと家に入つて、硯にべっ〜と唾を吐いて、秃筆で、カス〜と擦つて、

何のその百萬石は笹の露

と認めて、それを門人に見せた。門人一同は呆れ返つた顔を見合せた。

文政二年の十月十六日から、一茶は中風にかかつた。それまでは氣の向くに任せて、歩き廻つて、東は陸奥の隅から、西は九州の果までも足跡をとどめたほどの一茶も、もう流遊の望みも絶えてしまつた。

五十七歳の暮れの二十九日。

兎も角もあなた任せの年の暮

と吟んだが、まだ壽命があつて新らしい春を迎へたので、



今年から丸儲けだよ娑婆の空

と吟んだが、それからは「蘇生坊」と稱して居た。また自ら「信濃國乞食首領」と云つてゐた。

或る時、さる人に孫が生れた誕生祝ひの句を求められて、

親は死ぬ子は死ぬあとで孫は死ぬ

と認めてやつた。また或る時近所からの出火で、一茶の草庵も丸焼けになつた。其の時一茶は遠くへ逃してもせず、悠々と硯と筆だけを頭陀袋に入れて、近所の森に避難しながら、燃え上る火の手を眺めて、

螢火もあませばいやはやははは

と口吟んだ。

貧困は益々一茶の身に迫つて、租税の滞りも數ヶ月に及んだ。名主よりは矢のやうに、嘔みつくやうに督促を受けた。

「自分では世を棄てても、世の方で俺を棄てて呉れぬ、心にもない點料杯取つて、隱約の志さへ果す事が能ぬ、今は家をも身をも棄てる事を、塵芥とも思はぬけれど、病の爲に脚を取られ、棄てに行く山も林も遠い、あゝ是非もない。」

と嘆息して、淋しげに一書を認めて、年貢御免の嘆願書を奉行所へ出した事もあつた。

一茶はかうして、惜しくもない壽命を永らへてゐるうち、文政十年、持病の上に老衰が加はつて、今度こそはといふほど頼み薄うなつた。

見舞ひに集つてゐた門人たちに向ひて、



「俺が死んだら、必ず正風の句を學んで、決して俺のやうな眞似をするではないぞ。」と誠めた。それは己を知ると共に、また門人のうちにも、決して其の眞髓を知るものがないといふことをよく看破して居つた。まつたく一茶の風調は、古今獨歩、一茶一人のものであつたのだ。

其の年の霜月十九日、迎ももう駄目と見た門人が、

「何ぞ御辭世でも……。」と言ふと、一茶は微かに口を動かして、

鹽から鹽に移らんぶんかん

と吟んで、戶外に散りしく木の葉と共に、黄泉に散つて了つた。享年六十五歳、遺骸は茶毘に付して明窓寺に葬つた。

其の後門人共が寄り集つて、一つの記念碑を建てた。

松碑に寝て喰ふ六十餘州哉  
の句碑は今も残つてゐる。

曩に離縁をした妻が連れて去つた娘は、成人して中村某の妻となつてゐたが、醜い父の出入りを嫌つてゐたので、自然縁も薄くなつて、一茶の方でも往きもしなかつた。



## 蜀山人

## 一 「蜀山人」の由來

蜀山人は幕府麾下の士であつた。父の名は正智、母は杉田氏、寛延二年三月三日江戸牛込御徒町の家に生れ、名は覃、字は子紹、號を南畝と稱して居たが、それは大田篇に、「以我科椒載南畝」とあるところから執つたといふ。通稱は直次郎と呼んで居たが、後七左衛門に改め、戲名を四方赤人と呼び、更に赤良と改め、蜀山人、四方山人、遠櫻山人、舩羅山人、杏花園、石楠齋、寂惚子、惰農子などの數號があつたが、其の最も人口に膾炙して居るものは蜀山人である。

山人は幼い時から内田椿軒の門に入つて和漢の學を修め、寛延六年學問所の試験

に甲科を及第し、同八年に支配勘定役となつた。

山人は頗る奇才頓智に富んで、其のものすところの狂歌戯文は、滑稽諧謔、何人も抱腹絶倒せぬものはなかつた。山人は早くも十九歳の時には「寂惚先生」といふ戯文を著はした、其の文才を認められ、其の後「岡目八目」、「萬歳狂歌集」、「巴人集」などを著はして、益々其の名を高からしめた。

山人は一休禪師、曾呂利新左衛門などと共に、我が國に於ける頓智三名人として數へられて居る。山人が家を繼いで後、役目も累進したが、其の間幕命を帯びて大阪、長崎、其他の土地に出役を命ぜられた事もあつた。山人はさうした繁忙な中にも、悠悠閑々、滑稽酒脱、狂歌或ひは狂文を草して自ら娛み、或る時は人をしてドツと笑はせ、或る時は感嘆妙々を叫ばしめて居つた。



蜀山人の號は「四方山人」といふのを草書で書いたのを、誤つて「蜀山人」と讀んだ者があつたので、以來山人自らもそれを用ひるやうになつたと傳へられて居る。

また、或る時山人はさる唐人に、

唐人もここまで来いよ天の原

三國一の富士が見たくば

と詠んで贈つた。然るに其の唐人が返しに一の詩を賦して贈つて来た。名宛を見るに「蜀山人」と認めてあつた。それは山人が書いて贈つた「四方山人」の文字が、密接してゐたので、四方を一字の蜀と見違へたため、それから「蜀山人」と稱する様になつたとも傳へて居る。

蜀山人 記の「蜀山集」のはしがきには、享和元年幕府の命を帯びて、大阪銅座に

出向中、同地の町人等と公用以外の文書の往復に、本名を書くでもあるまいと、銅の名を蜀山居士と云ふ處から、蜀山人々々々と呼ぶことにしたと記してある。これは蜀山人の自記であるから事實としなければなるまい。それとも誤り讀まれたのを其のままに用ひたとあつては、あまり輕々しいので、特に此のこじつけを後になつて山人自らしたのかも知れない。

## 二 一切書不申候

蜀山人が、まだ幕吏の微祿を喰んでゐる時の事であるが、性來極めて無頓着である所から、役所に在つても、ちよつとの閑があつても文筆を弄して居るので、或る日の事に上役人は、山人に向つて曰つた。

「太田、其方は毎日役所に參つて、其の様な樂書のみ致して居つては、自然御上の



御用が疎略に流れる。今後は何人の依頼にも拘はらず、決して筆を執つては相成らぬぞ……。」

「畏まりました。」

山人が唯だ畏まつたのみでは、上役は承知しなかつた。

「それでは、誓書を一札入れて置かつしやい。」

「承知致しました。」

これにも山人は承諾して、早速次ぎのやうな誓書をすらくと認めて差し出した。

「私儀今後は如何なる人の依頼に不拘一切文筆を弄す間敷候間爲後日一書如斯御座候也」

上役は山人の此の誓書を見て、満足氣であつた。然るに其の事があつて四五日経ての事であつた。其の上役人の許へ大奥から奥女中が使いに來た。それは蜀山人に何か書かして呉れる様にと言つて、帛紗を置いて歸つた。上役人ははたと當惑した。山人には如何なる人の依頼に拘はらず、一切筆を執らねといふ誓書を入れさしてある。而し大奥からの依頼を自分で断はるのは不都合である。

「太田、先日は其方にああ云ふ誓書を差入れさせたが、今回は大奥より如々であるから、これに何か書いて呉れ！」

と、上役人は大奥からの帛紗を彼の前に置いた。

「これはしたり。例へ大奥であらうと、如何なる人の依頼に拘はらずといふ、誓書は反古には相成りませぬ。」



山人はきつぱり断はつて、上役人が何と言つても書かない。去る事とて知らない。大奥からはもう出来たであらうと使をして取りに寄越す。上役人は愈々當惑して、「太田、拙者が板挟みになつて困る。頼むから書いて呉れ！」泣きつかれて山人も、それではとあつて筆を執つて、立派な帛紗に「一切書不申候」と認めた。

此の皮肉に上役人も驚いた。けれどもそれは差出さぬ譯には行かないので、其の儘大奥に差出すと、大奥では其の文句が文句であるから、仔細ぞあらんと上役を呼んで取り調べると、これ／＼然々だといふ。仍で大奥からは改めて蜀山人に其の誓書を返して、自由にして遣はせといふ言葉であつた。斯ういふ始末で、山人が筆を止められたのも、僅かに十日ばかりに過ぎず、其の後は以前にも増して自由に筆を

執ることが出来た。

### 三 うすけせう／＼

「先生は御在宅でございますか。」

或る時であつた。斯う言つて訪れたのは、其の頃下谷池の端に住んで居た、有名な彫刻師、吉岡因幡といふ男と、今一人は芝神明の神原三郎四郎と云ふ兩人で、兼ねて蜀山人とは懇意の間柄であつた。

「いや、これは御兩所お揃ひで……」  
と山人も愛想よく迎へた。

「先生、かうほかく／＼暖かになつては、家にじつとして居らつしやるのも、餘りに氣の利いた話ではございませんまい。如何でございます。今日は一つ上野から向島の



方へ出かけて見ようではございませんか。」

「結構、参らふ。」

人間が氣輕なら返事も氣輕だ。仕度を改めるでもなく、兩人と打ち連れてふらりと家を出た。三人は戯れ言に聲高に笑ひながら、昌平橋を渡つて、御成街道を眞直に上野をさしてやつて来た。

「先生、もう此處からでも、上野の花が見えて居ります。」

と言ふと、蜀山人は、

「成る程……」

と言ふ聲の下から、

一めんに花は碁盤の上野山

黒もんまへにかかる白くも

と詠んだ。

「何時に變りぬ御名吟、恐れ入りました。」

兩人は賞めそやしなから、それから上野の花を見て、向島へ来て白髭のあたりまでうろつき廻つたが、

「先生、今晚は一つ吉原へ繰り込まうではございませんか。」

と一人が言へば、

「結構、参らう。」

あれから竹屋の渡船を越えりと、水死人だ土左衛門だと、河端で大勢のものが騒いでゐたので、蜀山人早速、



南無阿彌陀ぶつと浮いたり沈んだり

どこのお方かみす知らぬひと

と詠んだので、連れの二人は噴笑して了つた。

笑ひ興じつつ三人が、やがて吉原へと繰り込んだ。此の里ばかりは月夜かな。竹屋と云ふ茶屋に来て、其處から江戸町一丁目の扇屋といふ家を案内して貰つた。扇屋の主人宇右衛門は墨河と號して、多少文才のある男であつた。今日遊女屋などで、何々樓といふ屋號をつけるが、あの「樓」といふのは、此の宇右衛門が五明樓とつけたのが嚆矢である。

此家に案内された三人、花扇と呼ぶ遊女が吉岡の敵娼、神原にば玉扇、山人はもう老人の事であるから、少將と呼ぶ極く若い遊女をあてがつた。扱ていよく床入り

りといふ段になつたが、老人は馬鹿々々しくて、遊女なんぞに戯むれて居られない。勿論女の方でも馬鹿々々しかつたに違ひない。けれども其處は勤めの身であるから山人の様な老人の許に待つて居たが、見ると面白くも無さ相な顔をしてゐたので、蜀山人は筆をとつて、

組み敷いて見れば二八の小敦盛

ほうく前まへに前まへうすけせうかな

と認めて少將に與へた。少將はそれを見ると、其の狂歌の意が解つたと見えて、眞紅になつて逃げ出した儘やつて來なかつた。

「はゝゝゝ逃にけ出したな。これで今夜はゆつくり寝れる哩。」

翌朝になると、兩人が仕度をして山人の寝てゐる室へやつて來た。



「先生、まだお寢みでございますか。」

中からは鼾の聲が聞える。兩人が這入つて見ると、山人は一人寢の床で、前後も知らぬ白河夜舟。其處へ少將がやつて来て、

「あのお客さまへ、もうお伴れのお方が歸ると言ひなまんす、起きなまんして仕度をしなんし。」

と揺り起すと、山人漸く眼を覺して、少將の顔を見ながら、

ゆうべから能ふならしやんした今朝の雪

流れの身なら解けて見しやんせ

「はゝゝゝゝ。」

と高笑ひをしながら、起き上つて着物を着ると、少將が背後から羽織を着せかける。

うしろから羽織をきせるたばこいれ

よいのはなしをわすれしやんすな

と詠んで、

「はゝゝゝゝさア歸りませう。昨夜はステツンコロリと投げられた哩。」

と、笑ひ戯むれながら、茶屋のものに迎へられ、茶屋で一と騒ぎやつて家に戻つた。

#### 四 蜀山人の禁酒

蜀山人ある時九段上に邸があつた田安中納言の邸に伺候した。

「オゝ南猷か、苦しうない、近う進んで何なりと即吟を致せ。」

「はッ……。」

と一膝進めた蜀山人は、



雪月花きつと請け合ひ申しそろ

よつてくだんの上の風景

と詠むだ。これは田安侯の邸は、九段上の高い處にあつて、極めて見晴しが好く、雪にも月にも花にも、斯ばかりの處はないといふ意であるが、田安侯をはじめ、居列んだ誰れ彼れも、あつと感心せぬものはなかつた。田安侯も殊の外の機嫌で、唐棧の袴地と、八丈縞の反物とを贈ると、

寝惚には過ぎたる物がふたつあり

唐の袴にはむの八丈

と詠むだ。これはかの「家康にすぎたるものがふたつあり唐の頭に本多平八」と云ふ落首を踏むたものである。

此の時、伊川院の畫いた柱掛があつたが、柳の傍に一本の櫛があつて、猿が子を伴れてゐる畫であつたが、これに贊をと望まれると、

見渡せば柳に何かかきませ

親子ぞ猿の二疋なりける

と詠んだが、これは素性法師の「見渡せば柳さくらをこき交せて都ぞはるの錦なりける」の歌に本づいたものである。愈々出でて愈々妙なる山人の狂歌に、一同夜の更けるのも知らなかつた。

山人は十二分に馳走を受けて、殆んどヅブ十に酔つ拂ひ、一步は高く一步は低く、さうかと思ふと亂れ足で、田安侯の邸をあとに、小川町あたりに來ると、足が畏縮んで了つて、一步にも二歩にも前へ進まなくなつて、遂に其處に倒れたが、間もな



くグウく寝入つて了つた。

「おやく、また駿河臺の先生が！」

と言つて、通りすがりのものは行つて了ふのであつた。山人が酒に酔つて、往來に寝込んで了ふ事などは、もう誰も能く知つて居つた。

其のうちに辻番の老爺がこれを見つけて出したが、蜀山人だといふことが分ると、これまた今に始まつた事ではないので、其の儘打捨つて置いた。やがて山人は眼を覺して、

「あゝ……ウイ、あゝ、どうも好い氣持だ哩……。」

と言つて居たか、グロくとへドを吐いた。見て居たものは面を蔽ふて逃げ出すと、其處へ一匹の黒犬が出て來たが、今山人が吐き出したものを、悉く甜めて了つた。

其の上山人の口の端まで綺麗に甜めあけてしまつた。

「イヨ、黒公か、こりや親切に忝けないぞ。あゝ、どうも好い氣持だ。」

と言ひながら、やつとのことで起きあがつて家に戻つた。

翌朝山人が、貧乏徳利を傍に引きつけて、ゲイく飲んで居ると、何か相談でもして來たものと見えて、多くの門弟が打ち連れて訪づれた。

「先生お早うございます。」

「イヨ、これは皆な揃つて大層早いな。」

「時に先生、昨日は御面目を施しになつて御歸りになつたといふことでございますが。」

「ウム、昨日か。昨日は田安侯のお邸に招かれて如々であつた。」



「それからお歸り途に、土屋様のお邸の角で……」  
 「は、は、は、知つて居るのか。」

「知つて居るのかではございません。あゝ云ふことでは、いまに何の様な御怪我を爲さらないとも限りません。何うせ先生はお酒がお好きでございますから、全然御止めになる譯には参りませんが、一升召し飲るところは五合、五合召し飲るところは二合五勺といふやうにお慎み下さる事は出来ませうか。」

「は、は、は、酒を止めろの御意見かの、宜しく、ではこれから断じて酒は飲まぬことにしよう。昨日の様な事があつては、誠に見苦しい。太田南畝の名前にかゝはる。いや、善い御意見をして下された。持つべきものは門弟とは能う言ふた。改めて禮を言ひますぞ。」

「それでは、私どもの御願ひをお聴き入れ下さいまして、お酒をお止め下さいませるか、それは有り難ふございますが、お酒を召し飲つた方が、急にお止めになると、お身體にさはるとか申しますが、萬一然う云ふ事があつても何でございますから、少々は……」

「否や。飲まうと思へば飲みたくなるが、飲むまいと思へば舐めなくとも結構それで済むものぢや。明日からは一滴も飲みませぬ。」

「では先生、唯だお口ばかりでは何でございますから……」

「あゝ、誓書を書けと言はれるかな。よし。と言ひつゝ、筆を執つた山人は、くろがねの門より堅き我が禁酒

ならば手がらに破れ朝比奈



と認めて與へた。

門弟一同は、山人が禁酒すると言ふので、悦んで暇を告げて歸つた。門弟が歸ると間もなく、

「今日は……」

と威勢よくやつて來たのは魚屋の金八。

「先生々々今日はどうも素晴らしいものがございますよ。先生、初松魚々々々、途中で随分賣つて呉れと云ふものがありました。篋棒奴、何と言つたつてこればかりやア賣られねえ。駿河臺の先生に一番づけをして貰はなくちやなんねえつてんで持つて來ました。」

「然うか、金八折角だか要らないよ。」

「え、何だつて先生、こんな上ものが要らねえのでけす。」

「さア、何時もならば喜んで買うが、實はな、昨日酒の爲めに失策つたので、今日大勢門弟共がやつて來て、是非酒を廢めろと斯う言ふのぢや。俺も外のことなら兎も角、俺の身を思ふて、善い事を勸めて呉れるのぢやから、唯だ今禁酒をするといふ誓書を入れて、門弟どもを歸したばかりのところぢやでの。」

「へえ、先生、先生の前だが、其の門弟の奴等も分らねえ事を言ふぢやアありませんか。」

「何うして？」

「何うしてつて然うぢやございせんか。見なせえ、世の中に名前を残した人は、みんなお酒を飲んだぢやありませんか。こいつア先生が何時だつてか吾等に言つて



聞かして呉んなすつたことだが、酒位好いものはねえ、酒は憂を拂ふ高箒。」

「これく、高箒と云ふ奴があるか。憂を拂ふ玉箒ぢや。」

「然う然う、其の玉箒だから、飲んで暮すのが一生の徳だと言ひなつたでせう。」

「ウム、それは大きにさうだ。」

「大きにさうだつたら、飲んなせえ飲んなせえ、それにこんな新らしい初松魚で飲つて御覽なせえ。まつたく堪りませんぜ。何もお弟子衆に酒を禁つと言ひなすつたにしろ、何もお弟子衆が、一々先生の口の端に鼻を持つて来て、匂ひを嗅いで吟味しやしますまへし。」

「うむ、成るほど……」

「すりやア今お飲んなすつて、口を押し拭つて、知らぬ顔の半兵衛を極め込んでる

なさりやア分りつこはありますめえ。お飲んなせえお飲んなせえ。第一、先生のやうに飲つてゐなすつた人が、然う急に廢すてえと、病氣になつて、憂ひ箒を擔がなぐちやなりませんぜ。まつたく詰んねえ事を先生に勧めやがつたものだ。譯の分らねえかほちや野郎の弟子どもだ。」

「金八、かほちや野郎は面白いな。」

「面白かつたらお飲んなせえ、どうです、此の銀皮のところを作りませうか。」

「うむ、ぢや作つて呉れ、

鎌倉の海からとれし初松魚

皆な武藏野のはらにこそ入る

とはどうぢや。」



「なるほど、うまいもんでけすね。それでお酒を廢めようなんて思ひなされるなア間違つてまさア……。ヘイ、先生出來ました。どうです、此の生の好い色は……」

「うむ。旨さうだな。」

「旨さうぢやねえ、旨くて顎が落ちるかも知れませんぜ。ねえ先生、門弟のかほちや野郎共が何とか吐きましたら、魚屋の金八がこれこれだから飲んだとお言ひなせえ。今度また酒を廢めろなんて先生に勸めると、金八が天秤棒で打ちのめしてやると言つてたつて言つてお呉んなせい、ヘイ左様なら。」

「は、は、は、面白、面白、魚屋ぢや。オイ、逸助。」

「ヘイ、先生何ぞ御用でございますか。」

「うむ、酒を一本持つて來て呉れ。」

「先生、どうなさいます？」

「どうすると言つて飲むのだ。」

「これはしたり。只今先生は御門弟衆に、酒は一滴も飲まないといふ、誓書までお入れになつたではございませんか。」

「よし、それはお前よりも俺の方がよく存じて居る。何でも宜いから爛けて來い。」

やがて仕方なく逸助が、爛をつけて持つて來る。山人は手酌でちびりくと飲みはじめた。

「あ、何うも初松魚で飲む味は又格別だな。斯までに旨いものを、廢めさせるなどとは、成る程金八が言ふ通り、門弟共はかほちや野郎だな……。逸助、もう一本持



つて参れ。」

門弟は先生が禁酒なされたとあれば、口淋しいに相違ないからといふので、一同が相談をして、菓子や上等の茶を買つて持つて来た。

「先生、先刻は失禮いたしました。」

「いやあ、これはまたお入来かな。」

と酔服朦朧。門弟共は驚いて、

「先生、禁酒をするとおつしやつて、誓書までお入れになつたので、定めて先生がお口淋しいに違ひないと存じまして、一同相談の上菓子と茶を買つて来ましたが、御見受けしますと、お酒を召し飲つて居らつしやる様でござりますが、一體どうなされたのでござりますか？」

「はゝゝゝ、實はな、飲むまいと思つてゐたが、御身達が歸ると間もなく魚屋の金八がやつて来て如々での、初松魚で一杯やつたが、どうも氣持は格別だ。あゝ……ウイ。」

「是れは怪しからん、如何に魚屋が何と申ませうとも、お飲りになるとは先生にもお似合なさらぬ事と存じます。黒がねの内よりかたき我が禁酒、ならば手がらに破れ朝日奈の誓書が、斯の通り私どもの手にあつて、而もまだ墨も乾かぬ間に、早くもお破りになると云ふのは、甚だ怪しからんでは御座りませんか。」

「否や、どうも申譯が無い。では一つ詫びをしよう。」

と筆を執つて、  
わが禁酒破れ衣となりけり



それついでくれそれさしてくれ  
と、すらくくと認めて投げ出したので、門弟一同も呆然として、後の言葉が出なかつた。

五 眞赤な河骨

畫家の谷文晁が、或る時盆栽の河骨を手に入れて、畫几の傍らに置いて賞観して居たが、戯れに繪筆の圓朱の餘りで、其の河骨の花瓣を美しく眞赤に彩つた。  
或日不圖訪れたのは蜀山人であつた。さうして雅談に時を移して居たが、盆栽の河骨の花に眼をやつた山人。

「いや、これは珍らしい。河骨の花の紅いのは初めてぢや。何處で求められたか知らぬが、これは我が國の種ではあるまい。」

と嘆賞した。

文晁は一番山人を擔いでやれと思つたので、

「どうぢや、珍らしいものぢやらう。これは海外から渡來したものぢやで、滅多に手に入るものではない。」

と、而かも眞面目に答へた。山人いよく賞めそやして、如何にも欲し相に、何うしても一莖呉れと所望して首かなかつた。渡來の河骨、何うして何うして、一莖たりとも他に與へるやうなものではないが、別人でない貴公の事であるから、一莖だけ進呈しようと、文晁腹の裡に可笑しさを忍びながら、眞顔に如何にも惜し相に剪取つて山人に與へた。

山人は大いに喜び、暇を告げて歸途についた。折から五月雨いたく降りそそいで



居た。山人は右に傘を持ち、左には例の河骨をいと大切に持つて、北叟笑みしながら歩を進めて居た。間もなく我が家近くになつて、ひよいと見るとこれは何うだ。文晁から貰つた河骨は、傘の雫で何時の間にもやら真紅の色は褪せて了つて、何の事はない普通の黄色になつて居た。

「これは不思議！」

と、よくよく見ると、山人も初めて文晁に擔がれたといふ事を知つて大いに怒り、早速、

文晁がまつかな嘘と知つたなら

河骨をりて貰ふまいもの

と詠むで送つたので、文晁も顔を外して笑つたといふ。

六 仍而壁書如件

蜀山人の雅名は、津々浦々にまでも響いて、其の書を乞ふものが日毎に殖えて、山人も煩に堪へなくなつた。仍で掟書を作つて、これを壁上に掲げた。其の文に曰く、

年頃わが書を請ふもの多し扇子團扇扁額屏風帛紗唐和唐紙いやな羽織の胴裏に至る迄累々として果しなれば吾その請ふ者のうるさきによりて上中下の品を定む上は速かに書くべく中は預り置いて書くべし下に至りては書くべからずもし聞かずして預けおく者あらば扇は鼠の食むに任せ紙は反古堆中に沈めて永却浮ぶ瀬なかるべし。

上の部



- 一、詩歌の心をも辨へたる人
- 一、詩歌の心は知らねども甚だ是を信じてたくはへ置く人
- 一、名人の畫讚
- 一、表装至つて美にて掛ものとする人
- 一、至つて美人の直頼み中くらるにては不承知なり又頼みにては受取らず

中の部

- 一、詩歌の好みなく何にてもよろしきといふ人
- 一、人に遣るにでもなく自をさめ置くといふ人
- 一、扇一二本短冊二三枚唐紙一二枚好む人

下の部

- 一、惡畫惡紙和唐紙を辨へざる人
- 一、遠國へ近々旅立つ人に贈るといふ人
- 一、小肴の價高ければ扇にかゝせて遣るが徳用といふ人
- 一、何が一向わからねども書せて置が徳と心得てむせうに書せる人

此たぐひ婦人に至つて多し

- 一、筋違御門外の古道具屋山下あたりへ賣る人

此の外いやな事だらけにして見るもうるさき事多しあたら光陰を費して慾深き者の眼を悦ばしむるにしのびず仍而壁書如件

七反古紙

蜀山人の家に永年仕へて居る逸助といふ老僕があつたが、其の性質が至つて正直



だつたので、山人には殊の外愛せられて居つた。だが、何時までも奉公でもあるまいと、何程かの資本を興へて、小商ひを初めさせたが、何しろ餘り正直過ぎるので、どうも儲けることが下手で、間もなく資本も子も無くなした。仕方がないから氣まゝり悪さうにして山人の宅へやつて来た。山人が又幾何かの資本を興へる。また耗つて来る。

一日、また逸助はへへへへ笑ひながら、頭を搔いて山人の家へやつて来た。

「逸助、何か又金か？」「否え、今日は左様ではございません。」「ほう、珍しいな。だがお前の顔を見ると、どうも然うらしいぞ。」

「へえ、實はその何でございます。壁がすつかり破れて了つて、餘り見つとも無うございますから、旦那様のお書き捨ての友古紙でもございましたら頂いて、貼り

たいと存じまして。」「さうか。お前のほんやりした顔では、どうしても金といふ處ぢや、それではちと見當が違つたよ。よし、反古紙なら幾らでもあるから持つて行くが可い。」

山人は其處らにあつた反古紙を、手當り次第惜氣もなく逸助に興へた。實は逸助金の無心に出かけたのだが、山人に又金かと先を越されて、到頭言ひそびれて、反古紙を呉れと言つて誤魔化して了つた。

逸助が歸つてゆくと、途中で山人の門人とばつたり出遭つた。「逸助、何を貰つて来た？」「へえ、旦那様のお書き古しでございます。」「さうか、何うするんだい。」「へい、壁が破れて見つとも無うござんすから、これで貼らふと思ひまして。」「どれ、見せな。」



門人が逸助が持つてゐた穢い風呂敷包みを開けると、成る程書き棄てた反古には違ひないが、奇想百出、却つて改まつて書いたものよりも趣むきがあるものばかりなので、門人は驚いて、「逸助、これで壁を貼るのは惜しいものだからとつて置け！」と言つて別れた。門人は山人の許にやつて来て、

「先生、只今途中で逸助と會つて如々でございましたが、あんなものにお遣りになつて、壁などを貼らしては勿體ないぢやございませんか。」と言つた。「は、は、は、は」と山人は笑つて、

「勿體なかつたら、貴公が買つてやつたら可いだらう。すれば彼男に福があるのだから。」

と言つたので、門人共は先を争ふて、逸助から買ひとつた。逸助は、思はぬ金儲けをして喜んだ。山人のお蔭で門人共では儲かつたが、商賣をやつて客を相手にすると、忽ち耗つて資本を無くなして了つた。

### 六 盆 燈 籠

盆前の事であつた。逸助は白張の盆燈籠をシ、コ、タ、マ山人の家へ擔ぎ込んだ。山人は不審氣な面色、「逸助、家には新佛はないよ。」でございませうが、旦那様一つお買ひなすつて下さいまし。「買つて呉れ、困るなア、一體どうしたといふのだ？」逸助は盆燈籠で一儲けしようと、無理算段で仕入れたのはよいが、何處へ往つても一つとして賣れないので、とうとう山人の家へ擔ぎ込んだのであつた。其の事を山人に訴へると、

「さうか、可しく、それではおれが賣れる様にしてやらう。みんなで幾つほどあ



るんだい。「へい、有り難ふございます。また家にもございますから、百あまりございます。」百あまり？馬鹿にまた仕入れたものだな。よし／＼、みんな持つて来い。」と言はれて、逸助は大悦びで百あまりの燈籠を擔ぎ込んだ。山人は嫌な顔もせず、

「イヨウ、並んだな。ぢやあ逸助墨を磨れ。」と、これから逸助に墨を磨らせて、筆を執り上げると、一瀉千里の達筆を揮つて、一燈に一詞宛の狂歌を認め、別に珍文の引札を認めて、あらゆる知人の許に紹介したので、普通の燈籠の数十倍の價で、而かも瞬く間に賣れて了つた。逸助喜ぶまい事か蘇生したかのやうに喜んだが、間もなくまた耗つて了つた。

### 七 竹に雀のなぐり書き

或る時山人は公用を帯びて上方へ上つた。東海道のさる驛に宿つたが、徒然のあまりふと旅籠屋の座敷にあつた衝立に、竹に雀の畫が描いてあつたのを見て、何と思つたか、旅硯の筆をとつて、

雀どのお宿ほどこ歟しらねども

ちよつ／＼と御座れさゝの相手に

となぐり書きをした。

やがて何かの用で、宿の主人が此の室に入つて見ると此の落書、これは飛んでもない、我が家の秘藏のものに此の様ななぐり書きをするとは怪しからんと、大いに憤つて山人を罵つた。

山人は不圖した悪戯から、御秘藏のものを汚して濟まなかつたと、只管平身低頭



詫び入つた。主人はぶつ／＼吹きながら出て行つたが、間もなく再びやつて来た。其の時はもう以前の氣色とは打つて變つて。

「先生、知らぬ事とは申しながら、只今は飛んだ失禮を致しました。先生は近頃江戸で其の名も隠れなき、あの蜀山先生といふこと、さうとは知らず只今あのやうに失禮なことを申しまして、どうか御許し下さいまし。」と、平蜘蛛のやうになつて無禮を謝し、あまたの酒肴を出して、山人を饗應した。

#### 八 縁起直しの狂歌

「先生は御在宅かな。」と、或る時蜀山人の玄關に訪づれたのは、かねて懇意にしてゐる新瀉奉行の支配頭關源之丞と云ふ男であつた。山人は悦んで迎へたが、源之丞どうしたのか一向に浮かぬ氣色に、

「どうなされたかな、今日は何時になく憂ひを帯びて居られるやうぢやが。」と山人に問はれて、「實はその厭な夢を見ましたので。」「ほう、夢を？ どんな夢を見なされた。夢は五臓の疲れ、寢汗は心の衰へ……。」「さあ、其の夢が實に厭な夢でござつて、實は家の中に松の樹が生えた夢を見ました。」「ほう、松は常盤樹で、まことに結構な夢ぢや。」「否え、それまでは宜うござるか、すると其處へちら／＼と雪か降つて参りまして、其の松にも積つたが、何だか家の中が野原にでもなつたやうな氣がして、おやつと思つた時眼が覺めました。どうもはや氣になつて、實は今朝は食事も進まぬやうな次第で……。」

黙つて聞いて居た蜀山人、筆をとるなり、

引窓を忘れて寝たか南無三ほう



## 荒神松にかかる白雪

と認めて源之丞に與へると、源之丞は見てゐるたが忽ち笑顔になつて、

「は………これですつかり縁起が直りました。有り難うございます。」と、大いに悦んで立ち歸つた。

また或る年の正月三日の事であつた。かねて蜀山人の許に出入りをして、狂歌の道を教へられて居るものうちに、さる金満家の主人があつたか、此の男が山人の許に泣き相な顔をしてやつて來た。

「先生々々、正月の三日だつてのに、何うも縁起の悪い事が出來ました！」「ほう、大の情氣で居るやうだか、一體どうなされた？」「外でもございせんが、今朝店のものが表戸を開けますと、門松に女の癩癩病が倒れかかつて、泡を吹いて唸つて居

ると申しますから、出て見ると成る程、事もあらうに門松にしがみついて、ぶらぶら泡を吹いて居りました。何が縁起が悪いので、こんな縁起の悪いことはございせん。とても今年一年は碌なことはないに違いないと思ひますと、もう何をする氣にもなれません。」「いや、それは芽出度い。」「ええ……。」「正月の三日から、門松に癩癩病が倒れかかつて泡を吹いてゐると云ふのは誠にどうも結構だ。だが、お前が縁起が悪いと云つて氣にするなら、俺が一つ祝つてやらう」と、

門松にもたれて泡をふくのかみ  
是れぞまことや辨財てんかん

と詠んだので、門人も初めて氣色を直し、にこ／＼顔で禮を述べて立ち戻つた。

また其の頃、日光寺行に河野對馬守と云ふ者があつたが、或る時父の賀の祝ひで、



紅白の餅を二個宛配つた。さうして残つた餅を數へて見ると、四十九といふ半端であつた。四十九といふ數は最も忌むべき數である。何がな不吉な事がありはせぬかと、ひどく家内のものは氣にしてゐた。處が此の家の家來に山田孫四郎と云ふものがあつたが、かねて主人が蜀山人とは懇意にしてゐたので、祕かに山人の許を訪れて、如如の譯だから、足勞を願つて何とか縁起直しをして貰ひたいと頼んだ。

山人は快く引き受けて、孫四郎が歸つた後で、素知らぬ顔で對馬守の家に出かけた。

「お目出たいな。」「これは先生でござりますか。」「どうなされたのぢや。今日のお目出度に、皆なども浮かぬ面をして居られるやうぢやが。」「いや、先生、實は斯うでござります。今日は父の賀の祝いで、餅を配りました。」「それは俺もいただき

ました。」「ところが、残つた餅を數へて見ますと、四十九といふ半端が残りましたので、何か不吉なことでもあるのではないかと、只今斯うして心配をして居るところでござりました。」「四十九残つた。いや、それはどうも目出たい、不吉どころかお祝ひの上のお祝ひぢや。」「と言ひながら、硯を借り受けて筆をとると、

七つづつ七福神に配はや

數は四十九あらう賀の餅

と認めて、主人の前に差し出しは。主人ばそれを見て、

「あゝ、成るほど、まったく祝ひの上の祝ひでござる。否や忝ふござる。」「と、それから急に家内の顔も晴れ々々となり、山人の狂歌を床の間に飾つて、大いに祝つて山人をも十二分に歡待した。



九 蜀山人の辭世

時は文政六年四月二日、友人と共に妾を伴ひ、葺屋町の芝居を見て家に歸つた山人は、例の如く快談快飲に時を過ぎ、四日には氣色が勝れないと云つて、好きな酒も飲まず、比目魚で茶漬飯を食つたが、一詩を賦して曰く、

醉生將夢死、七十五居諸、有酒市脯近、盤飧比目魚。

と、それから熟睡して、六日の午後に七十五歳を以て奄然として逝つた。

浮世の苦勞は何處へやら、三分五厘に茶化して送つた山人も、遂ひに死を免かれることは出来なかつた。辭世には、

郭公なきつるかたみ初松魚、春と夏との入あひの鐘。

とある。法諡は杏花園心逸日休居士、墳墓は小石川原町本念寺にある。

一 休禪師

一 前生は三疋の犬

何時も花咲く色の港、往々来るさの浮れ客の絶間とてない、泉州境の北の庄。朝に送る源家の客、夕に迎ふる平家の客人の傾城に、現を抜かせど本性は失はぬか、

「それ、来たぞ、道を除けろ！」と道を開く。其の中を悠々と通るのは、髑髏に濱の總模様。細身の脇差を落しに差し、握り太の尺八を、背筋に斜にさした意氣な姿。それは當時界限で知らぬものもない野晒次郎と呼ぶ俠客であつた。

と、聞もなくまたあとから、人々の除けた中を、同じ方に歩いて行つたのは、横雲に明烏の總模様の伊達姿、それは曙の太郎と呼んで、當時人々から、野晒か曙か



と言はれるほどの俠客であつた。二人が廓に入り込まぬ夜とはなかつた。それも其の筈で、一人の傾城を我こそは、否や己こそは靡かせて見せると、氣前と意地で奪ひ合ふて居た。其の傾城と言ふのは、廓で全盛の地獄太夫と云つて、浮き川竹の傾城ではあるが、金では賣らぬ女の意地、氣に合はなければ、相手が太名高家でも、いつかな座敷に出ない。出る時は坐布團、煙草盆まで禿に持たせ、茶屋揚屋でも蒲團を敷かねば坐に着かぬほどの豪勢さ。其の傾城を争ふ二人は、或る夜圖らずも一緒に茶屋に「地獄太夫を」と申し込んだ。

一と月経ち、一二月過ぎたが何の便りもなかつた。内々探つて見ると、二人とも男をみがくものだから、一人に許して一人に許さねば、必度大事を惹き起すに違ひない。と云つて二人に逢へば戀の仇、血を流すのは知れ切つて居る。それよりも寧

そ二人ともに逢はぬが互ひの身の爲めであらうといふ魂膽と知れた。さうと聞いては猶更ら黙つて、引かれない男の意地、邪魔する戀の仇、刃にかけてもといふ、雙方が口には言はないが心のうちであつた。

朦朧にかすむある春の宵であつた。ゆくりなくも廓の中でばつたり逢つた。意趣を晴らす好機會だとは互の胸、擦れ違ふ途端に曙は野晒の足をグツと踏んだ。

「ヤイツ、野晒、手前の眼は看板かッ。」何だつて、手前こそ兩つの眼玉は何の爲に持つてやがるんだ。他の足を踏みやがつたら、大きに悪うございましたと謝罪るのが本來なのに、あべこべに喧嘩を吹つかけるたアなんだ。「何をッ、俺の顔を知らねえか、廣い泉州でも知らねえ物はねえ、曙の太郎たあ俺のこつた。」曙たらうと夕暮だらうと、此の俺をば知らねえか、俺は野晒の次郎だッ、手前見てえな小僧



ツ兒に、巫山戯た眞似をされて堪るけえ。」「小僧ツ兒たあ生意氣だツ。」と、二口三口争つたが、初手から喧嘩を賣らうといふ胸三寸の二人、忽ち脇差の鞘を拂つた。「それ抜いた。親分同志の出入りだ。」と、場所柄だけに騒ぎ出した。あはや二人は白刃をかざして、斬り合はうといふところへ、來かかつた一人の法師があつた。「これ／＼待たつしやれ。」と二人の中に分けて入つた。

「やい、坊主の分際で出しやばつた眞似をしやがると、手前も一緒に引導渡して了ふだ。」「退け、やい坊主。」「待てといふに……」法師は臆する色もなく、持つてゐた鐵如意で、二人の急所を發矢と打つた。呀と叫んで二人は太刀を取り落した。

「は／＼／＼音に聽えた野晒に曙、思つたほどにもない腕ぢやわい。拙者は住吉の一休ぢや。何の意恨があつての事か知らぬが、此の人込みの中で刃物三味、過つて

他人に怪我でもさしてはならぬ。まあ／＼拙者に預けさつしやい。」と云はれて兩人も吃驚した。

「あなたが一休禪師様で……。」「これは飛んだ失禮を致しました。實は此れ／＼如々でございます……男の意地でございますから、どうかお控へを願ひます。」「いや、それはなるほど一應最もちやが、喧嘩といふものはな、止め人があるのが花ぢやで、主の仇が親の仇ならいざ知らず、多寡が女一匹ぢや。それも何かと言へば傾城ぢや。美醜の分ちも皮一重、骨には男女の別ちもない。それに迷ふてウカ／＼と、あつたら命を捨てようと、はては人に知られた男侠にも似合はぬ馬鹿さ加減……。」と、宥められて仕方なく二人も手を控へた。

「元來お前たちはな、俺の天眼通で見ると、前生は大和國岩倉山の麓に棲んだ、



白、黒、赤の三匹の犬ちや。赤は女と生れて今の地獄太夫、白と黒とはお前たち二人ぢや。「えつ。」「あの手前共が犬。」「怒んなさんな、怒んなさんな。怒つて見たところでも何の益にもならぬ。人間は誰れでも前生といふものがある。百萬石の大名でも、前生は馬や牛ちやつたといふものもあるテ、前世の縁を其のままに、一匹の女を二人で争ふ、さて、浅猿しい事ぢや。お互ひに妄執を棄て、以來は兄弟の好誼をするがよい。」「へい、さう云ふ譯でございましたら。」「俺にも異存はございません。」「いやそれでこそ人間に生れて来た面目がある。然らば兩人、兄弟の盃を差さう。」と、一休禪師が先きに立つて料理茶屋へあがつた。

料理茶屋で二人の仲々圓く治めた一休禪師は、河原を遊ぶ千鳥足で、蹠蹠と來たのが仲の町、其處に丁度通りかかつたのは地獄太夫の道中であつた。

「おゝ、聞きしにまさる美しさぢやわい。」と一休は恍惚れた。太夫はにつこり微笑むで、一休とは知らず、御出家様にも似合はぬといふ意味で、

山居せば深山の奥に住めよかし

こゝは浮世の堺ちかきに

と詠んだ。一休は、「なんの、お前たちに拙衲の遊戯三昧が解るものかえ。」と云はぬばかりに、

一休が身をば身程に思はねば

市も山家も同じすみかよ

と返したので、太夫も初めて一休であつたといふことを知つて驚いた。するとまた一休は、



聞きしより見て美しき地獄かな

と詠むと、太夫も早速、

生きくる人も落ちざらめやは

とつけた。

「何はなくとも、先づ御一緒に……」と云つて、太夫は一休を我が家に案内した。

やがて持て来る酒肴、一休の前に列べられた山海の珍味、一休は酒にも肴にも、何の遠慮もなかつた。地獄太夫も呆れて了ひ、

「一休禪師様は、活佛様と豫々人の噂に聞いてゐるたが、見ればまアあの様子、事によろと人違ひかも知れぬ、よう氣をつけて見てゐるや。」と言ひ含めて、そつと座を二つて隣室へ出た。

打てや太鼓、鳴らせや鼓、飲めや歌への騒ぎに搦む三味線、襖のかけから、そつと覗いた太夫は驚いた。あまたの藝妓や帮間は、みな髑髏のやうで、一休一人が踊り廻つてゐる。注げば飲む。乾せば注がせる。ありつたけの狂態を盡して、十二分に酔が廻つたか、ゴロリと倒れると白河夜舟。既告ぐる頃、一休はふと眼を覺して、

「これはく、太夫の部屋であつたか。」と、驚ろいて歸らうとすると、太夫は慌て、法衣の袖を控へた。一休はしげくと太夫の顔を見て「何と美しく見ゆるわい」「貴僧にも……」とすり寄つた。一休は強く刎ねのけて、

「ても、さても、その腸の臭いことは……。」「腸の臭いとは……。」と太夫は眼を光かした。



「お前の前生は犬ぢや。岩倉山の赤犬ぢや。」

「えつ、あの妾の前生は犬……。」「さうぢや、まア聞かつしやれ。」と、一休は彼の曙と野晒の一件を話して聞かせて、

「ても、業の深い赤犬ぢや。」と言ふと、太夫は身を慄はせた。太夫の臉は涙に濡れた。

「業とおつしやれば、妾ほど世に哀れなものはござらうやら……小さい時に母様に死なれ、父のためにとまだ凶も東さへも知らぬ年に此の里に賣られて身を沈め、朝な夕なに數多に變る仇枕、罪もない男をは、迷はせたも何れ程やら、切めては罪の輕うなれと、罪障消滅懺悔のため、襦袢に縫ふた地獄の模様、それと知りつゝ通ふ人、唯さへ女は五障三従、その深い罪にこの罪を、合せましたら後の世は、どのやうに

あらうかと案じられ、他人には語らねど心のうちに、朝夕守りの觀音様、お助けあれと手を合せ、泣かぬ日とてはござりませぬ。」と、涙ながらに物語つた。

「はてさて、太夫にも似合はぬ心の迷ひ、迷へば遠い彼の世の旅。悟れば近い地獄極樂、後生を大切と思ふなら、觀音様を拜まうより、身を慎しむに過ぎたはない。口と意を一つにして、誠を行ふが何よりぢや。」と、言ふかと思ふとノイと起つて、其のまま何の執着も残さずサツサと歸つて了つた。

## 二 發心の動機

後小松帝の朝廷に、宮仕へして居た伊豫の局は、容姿艶麗、花も恥ふほどの美しさであつたが、何時しか貴ごとなき御方の御胤を宿し、暫しの暇を乞ふて宮をさがつた。



やがて臨月となつて、産み落したのは玉のやうな男の御子であつたが、この御子こそ即ち一代の奇才、活佛と稱された一休であつた。それは足利の中世を謳ふ應永元年も押しつまつた師走二十八日の曉であつた。それで一休こそは、正しく後小松帝の御落胤だと傳へられて居るが、帝はその時實算正に十八歳にあらせられた。

幼時を千菊丸と呼んだ。(一説には菊麿とも傳へて居る) 高橋三位滿實卿の妹、玉江といふものを乳母として育てられた。千菊丸は幼い頃から、溢るゝばかりの天稟の奇才があつた。玉江は性來容姿面貌の醜い女であつた。色の黒いためには、「おろく、」と綽名されて居つたが、千菊丸は何時とばなしにそれを聞き覚えてゐて玉江を呼ぶのに、「おろく、」を以てした。

千菊丸が七歳の冬のある日であつた。其の日は朝から牡丹雪が降つてゐた。千菊

丸は悪戯に餘念がなかつた。

「もし若様、そのやうにお悪戯のみ遊ばすものではございませぬ。もうお幾歳におなり遊ばしましたか？」「たはげぢやな、そちは鷹が生れた時から育てたといふに、鷹の年を知らぬとは……。」「オホ……。まアお聞き遊ばせや。昔菅原道真公は、お年七歳の時に、丁度今日のやうに雪の降つてゐる日、お側の小督と申すものを御覽になり、お歌をお詠み遊ばした。そのお歌は、「降る雪が綿々なれば手にためて、小督が袖につめたくぞ思ふ」といふのでございます。若様ももうお七歳、何時までもそのやうにお悪戯ばかり遊ばさず、學問、手習ひ、歌詠みなどの御稽古を遊ばせや。」「なに歌？」歌なら鷹も詠める。「ほう、若様にお歌が、詠んでごらん遊ばせ。」「うむ……。」



千菊丸は、玉江に聞かされた、道眞の幼時の歌と云ふのを口吟んで、小さな首を傾けて居たが、

「うむ、出来たく、斯うぢや、

降る雪がおしろいなれば手にときて

おくろが顔にぬりたくぞ思ふ

「どうぢや。」と詠んだので、玉江は勿論、お附きの女中たちも、面を見合して其の奇才に舌を卷いた。

それは彌生も半の花の盛り、暖い日を幸ひに、千菊丸は岩清水八幡へ、乳母玉江をはじめ、あまたの女中に護られて参詣した。表門で乗物を棄て、石疊を通つて行くと、乳香兒を抱いたり、または頑足ない子供を曳いたりした乞食がぞろ／＼と

集つて来た。

「乳母、あれは何ぢや。」と千菊丸は問ふた。

「あれは物をひと申しまして、往來の人に一紙半錢の袖乞ひをする、卑しい非人でござりまする。」と答へると、何思つてか千菊丸は、鈴の様な兩眼に涙をたゝえて、

「乳母や、非人乞食でさへ母様があるに、鷹には何故母様がないのぢや。」此の一語には玉江をはじめあまたの女中も、胸も張り裂く思ひがした。けれども左あらぬ體で、

「此處は往來のこととござりまする。何れお館へお歸り遊ばした上、お話し申し上げまする。」と言つたが、千菊丸はどうしてもそれを聽かねばならぬと動かなかつた。乳母の玉江も是非なく、



「あなた様の御母君は、あなた様が御生れ遊ばすと程もなく、冥途といふところへお越し遊ばされました。」冥途といふところは。「極樂浄土でございます。」「それでは、其の極樂浄土とかへ連れて行つて、母様に會はして呉れ。」「極樂浄土は遠い十萬億土、乳母には御案内が出来兼ねます。」「それでは誰には案内が出来る。」

「其れは、今京都に名高い三名僧、東福寺、妙心寺、大徳寺の御住持方にお願ひ申せば出来まする。」「それでは東福寺へ参らう。」乳母の玉江は困じ果てた。言葉を盡して慊して見たが、千菊丸は駄々を捏ねて肯かなかつた。

是非よく八幡参詣もそこへにして、東福寺に行つて住持傳道に會つた。「鷹は母様に逢ひたいのぢや。極樂浄土に案内して呉れ。」と頼んだ。

「それは殊勝なお心。御案内申上げたいは山々なれど、極樂浄土と言へば遠い處。」

とても拙者のやうな老年には覺束なうござりまする。紫野大徳寺の養與禪師は學徳兼備の名僧、この方におたのみなされ。」と言ふ。それではといふので、大徳寺に来て養與禪師に此の事を告げて頼んだ。

「おう、それはお易いこと。なれども極樂浄土へ参るには、早く出家得道遊ばして、長行徳法徳をお積みにならねばなりません。」「それでは、今から出家せう。」と言つて、玉江や他の女中たちが、如何に制めても肯かなかつた。そこで養與禪師も、「なに四五日も経たぬ間に、里戀しうお成りであらうから、それまで兎も角もお預りして置きませう。」と言ふので、仕方なく玉江をはじめ女中たちは引き取つた。

千菊丸は、伶俐な様でも子供であつた。菓子を與へると、「これは不味い。もつと旨い菓子を持て。」と我儘を言ふ。「佛門にお入り遊ばす上からは、拙納は師匠、あな



た様は弟子、母君に會ひたいと思召すなら、師の拙衲の教へを守り、強い行徳法徳をお積みにならねばなりません。それにそのやうな我儘を申されては逆ものこと、サツサとお館にお歸り遊ばせ」と言はれると、千菊丸は打つて變り、「いや、お言葉を守ります。我儘を言ひませぬ。」と、楓のやうな手について詫びるのであつた。

四五日も経たぬうちに、里心が出て歸りたいと云ふだらうと思つてゐたのに歸らうと言はぬ。玉江の方でも、もう大徳寺から、お迎へに來いといふ使者かと、毎日首を長くして待つたが來ない。堪りかねて様子を見に行つて見ると、千菊丸は忠實々々しく、他の小僧達にまじつて用などをしてゐた。そしてどうしても出家する。いふので、其の事を畏きあたりへ奏聞に及ぶと、千菊丸の意に任せよと 御説であ

つたので、茲に初めて千菊丸は剃髮して、其の名を宗純、道號を一休と呼ぶことになつた。

千菊丸の母伊豫の局は、千菊丸を生むと程なく不歸の客になつたのであつた。けれどもまた一説には、然うではなく、千菊丸は成人して一休禪師として其の名を知らるゝに至つた頃まで生きてゐて、大の淨土教の信者であつたのを、一休が禪に導いたと言つて、其の時の母君との問答などが傳へられても居る。

### 三 幼年時の奇才

一休の飄逸奇才の逸話は、其の少年時代に多く傳へられて居る。ある師走の末つかたであつた。さる檀家から「佛前へ」と言つてまだ搗いて間もないと見えて、柔かな鏡餅を一重ね届けた。そつとさはつて見てゐた一休、折から師の養父禪師は不在



だつたので、子供心に面白さも半分は手傳つて、片端の方を缺きとつて袖に隠した處へ、折悪しくも師匠が歸つて來た。

「これは先きほど檀家の某から持つて參りました。」と一休は鏡餅を示した。見ると其の片端が缺けてゐるので、さては一休が缺いたなと、養叟禪師は見てとつたので、

「満月無邊、破片、何處にかある。」と一休を睨むだ。一休は失策だ。事露纒に及んだと思つたので、

「雲隠れして此處にあります。」と言ひつゝ、法衣の袖から缺けを出した。師匠は其の當意即妙に、叱る事も出来ないで、微笑むだま居室に入つた。

或る夜の事であつた。一休は師匠に本堂のお燈明を消して來いと命ぜられた。氣

輕に返事をして起つて行つた一休は、須彌壇に駆け上つて、ブツ／＼と口で吹き消して戻つて來た。

「宗純、其方は今須彌壇のお燈明を、どうして消して來た？」と問ふた。

「どうしてと申しまして、口で吹き消して參りました。」「これはしたり、口で吹き消すとは勿體ない事ぢや。口と云ふものは不淨を喰ふもの、それ位の事は今更ら申さずとも、其方ほどのものであるから、辨まへて居られよう。」といふ小言、一休は謝罪るかと思ひの外、

「お師匠様、お經を讀んでは不可ませぬか。」

師匠の養叟は、それ又何か言ひ出すぞと思つて、

「それはまた何故ぢや。」と問ひ返した。一休は一膝乗り出した。



「唯今承はりますと、口は諸々の不淨を食べるからお燈明を吹き消しては勿體ない  
いと仰しやいましたが、其の不淨の口で、佛前に尊いお經を讀むことは叶はぬ筈、  
お師匠様、お經は何處で讀みますか。」と突つ込んだ、なるほど尊い經を口で讀むな  
らば、お燈明を吹き消したところで、何も勿體なくない筈。いざとなれば何時も一  
休はかうした才氣煥發に、師匠の養夷は黙つて微笑むだし。

養夷禪師の許へ、機屋竺齋といふ男が出入をさして居つた。此の男の母は長崎の  
生れで、父は和蘭陀人であつたが、父が和蘭陀に歸る時、錦を織ることの口傳を受  
けたので、其の後竺齋は京都に上つて機屋を開業したのでつた。町人に似合はぬ風  
流氣のある男で、碁も打てば茶道も一通り心得てゐる。花も生ければ歌も詠む、そ  
の上坐禪を少しばかり嚙つて居つた。養夷禪師とは碁敵であるから、來ると何時で

も長座をする。それがためには小僧たちも眠くても寢られないので迷惑をするが、  
竺齋は頓と氣がつかぬらしい。來るとまたかと顔をしかめる。碁に頬冠りをさして  
立てる、下駄に灸を据える。それでも何の利目もない。

或る日であつた。小僧中僧が寄り集つて、なんとかして、あの竺齋爺が來なくな  
るような工夫はあるまいかと相談した。其の結果は智慧の固りだと思れてゐる、一  
休に相談を持ち込んだ。一休は其の位の智慧には困らなかつた。幾らも有ち合せが  
あつた。

翌日一休は美濃紙を二枚繼いで、

「四角の皮刺一切門内に入る可らず」

と筆太に認め、それを大徳寺の表門へピッタリ貼りつけた。



竺齋は其の目もやつて来た。見ると此の筆太の貼紙、さてはまたあの一休が何か  
 畫むだなと思ひながら、スタく／＼玄關へ来た。竺齋は身が冷えるからと云つて、寒  
 くなるに常に獸の皮を羽織の下に着込んで居つた。

「もしく、あなたは門前の貼紙を御覽になりましたが。」「見て參つたか、それが  
 如何致したの。」「あの貼り紙を見られたら、あなたは門内へ入れぬ筈。」と威儀を正  
 して言つた。

「ほう、何故拙者は門内に入れませぬかな。」「それはあの貼紙を見られたらお判り  
 の筈、あなたは相變らず四足の皮を着てお在でなさる。清淨無垢の修行寺、獸の皮  
 を身につけて入ることは相成りませぬ。」と詰ると、竺齋はカラ／＼と笑つた。

「は／＼／＼然らば本堂にある彼の太鼓は、抑も何の皮で張つてありますかな。」

とグツと一本やり込めた。流石の一休も、これはと思つたが、何と思つたかバタ／＼  
 本堂の方へ駈けて行つた。竺齋は一休の後姿を見送つて、

「は／＼／＼賢いやうでも矢張り子供ちや哩。」と言ひながら、其處からあがつて、  
 方丈の方へ歩いて行つた。

竺齋が方丈の廊下に差しかかつた時、突然駈け出した一休、手頃の棒で竺齋の腰  
 のあたりを三つ四つ續けさまに殴りつけた。驚き且つ怒つたのは竺齋、振りかへつ  
 て見て、

「これはしたり一休殿、何故其の様な棒を以て打たれます。」と、一休の顔を睨みつ  
 けて詰問した。一休は冷やかに笑ひながら、

「本堂にある太鼓は、獸の皮で張つてありますから、一日には何度となく佛罰を蒙



むつて殴られます。あなたも獸の皮を身にまとふてお在でになるので、佛罰でござります。愚圖々々仰しやれば、まだ此の上佛罰が當りますぞ。」と言つたので、流石の竺齋も二の句がつけず、一休に謝罪をした。そして一休が然ういふ事をしたのも竺齋が長居をするので、他のものが困るためであつたといふ事を知つて、「これは一向氣のつかぬことであつた。」と、以後竺齋も大いに慎むで、長居をしなくなつた。竺齋は以來一休の奇才を愛して居たが、時折り難問題を持ちかけては、一休の奇才を試すのであつた。一日、今度こそ一番一休を困らしてやらうと考へ、使ひを大徳寺にやつて、一休をお伴ひの上、養父禪師に是非入らせられるやうにと招待した。禪師は一休を伴れてやつて來たが、四方山の話に花が咲いて、やがて其處に臆部が運ばれた。一休は椀の蓋をとらふとすると、

「あいや一休どの、其の椀の蓋を取らないで、中の御飯を召し食らつしやい。」一休それは出來ぬと云ふかと思ひの外、

「宜しうございます。」と云つたが、何か思ひ出したやうに、一言三言世間話をしてゐたが、

「あつ、これはしたり、誠に申譯のない事を致しました。餘り話に身が入りました、折角のお汁が冷えました。」と、汁椀に手をかけて、さも困つたといふ顔。圖らるるとは知らぬ竺齋、

「それは氣のつかぬことで、お取りかへ致しませう。」と盆を出すと、一休は其の上汁椀をのせて、

「どうか、此の椀の蓋を取らないで、中の汁をお取り替へ下さい。」と言ひ添へた。



竺齋はつと氣がついた。

「これは恐れ入りました。」と平服した。一休は言葉を改めて、

「蓋を取らずに中の御飯を食へよとは、出来ぬことを他に強ひる愚かなこと、此人たるの道に背くもの、無理難題も道理に適はずば、痴人の寝語に異ならぬ、以後はお慎しみあれ！」と言はれて、竺齋またやられたかと恐れ入つた。

一休の名は、獨り大徳寺の中のみでなく、洛中洛外にも響いて、かくれないまでになつた。

#### 四 執着の無い一休の横想慕

一休は師の跡を繼いで、大徳寺の住持となつたが、日本全国を行脚して、到る處に其の天性の奇才を發揮した。

或る春の日の事であつた。庭には櫻の花が二片三片風もないのに散るのを眺めながら、一休は一人酒を酌んでゐた。處へさる大檀家の奥方が慕參がてら挨拶に來た。相手が美人だけに、流石に一休も碎けて出た。

「これはく、ようこそお入來なされた。酒は相手とやら、まゝ一献、召し上れ。」と、強いて引き留め、差しつ差されつ盃の數も重なつて、もう黄昏時となつた。奥方は驚いた風に、

「これはまア飛んだ長座をいたしました。」と、早や起つて歸り仕度。一休はそれを引き留めて、

「久々の御入來、今宵は當寺にお泊りなされ、春の宵の一刻は實に千金、禪家に似合しからぬ事ながら、是非今宵はお泊りなされ。」と袖を捕へて、一休禪師も妙に眼



を憚かたじけかした。

「まア禪師様としたことが、何をお戯たはむれ遊あそばします。長座致ちやうざいたしましてさへも心の咎とがめ、それに一夜泊やとまれとは、まして妾わらわは夫をととのある身みでござりまする。さ、お離はなし下くだされませ。」と云つたが、一休いっしやうなかく、背せかばこそ、

「夫をととある御身おんみだといふことは、重々知じやうじやうつてのこと、さう言いはれずと……」奥方おくがたもムツとしたが、柳眉りゆうびを逆立さかだて、

「今まで活佛いきぼつ様のやうに思おもふてゐた一休いっしやう様、それでは妾わらわに心こころあつてお引ひき留とめなされたか、見みると聞きくとは大きな違ちがひ、でも見下みさげ果はてた乞食こじきやうしん道心だうしん、そこ離はなさんせ。」と、力ちからまかせに袖そでを振ふりはらひ、罵ののりながら逃にけ歸かつた。

歸かつて夫をととに向むかひて、斯かげ如やう々と物語ものがたつて、呆あきれ果はてた生臭なまぐさ坊主ぼうしゆだと云つて、一休いっしやう

禪師ぜんじを口くちを極きはめて罵ののつた。すると夫をととは、

「これはしたり。一休いっしやう様なればこそあなたに向むかひ、其そのお言葉ことば、活佛いきぼつ様とも言いはれた一休いっしやう様に、一夜いちやたりとも………其そ女の果報くわほうといふものぢや。身みの冥加みやうがを知らぬやつ、何故なげ泊とまつては來こなんだか。決けつして俺わしは恨うらみはせぬ。とつと行いつて一休いっしやう様を慰なぐさめて來こい。」と言いつた。

間まもなく眞珠庵しんじゆあんの門もんを靜しづかに叩たたいて、

「恐おそい入いりますが、ちよつとお開あけ下くださいまし。先刻さきほどはお情なさけのお言葉ことばにも拘かまはらず、無禮ぶれいな事ことを申まを上げて情つれなう御暇おいとまを致いたしましたが、宅たくへ戻もどつて夫をととに打うち明あけますと、二心しんない趣おもひを申まをし入れ、只今ただいま暇いとまを乞こふて參さんじました。早はやう此處こゝ開あけて給たまれや。」と申まをし入いれた。と中なかから應いへるのはたしかに一休いっしやう、



「おゝ、何人かと思へば奥方か。夜中女の身一人でようこそ……いや先き程は心にもかかつたなればこそお留め申したなれど、今は更らに心にごさらぬ。此處は持戒の道場、女はならぬ。とつとと歸らつしやい。」と、今度は打つて變つた情ない挨拶。

「えつ、それでは妾を嬲りものに遊ばしたか。」

口惜しうも思ふたか、中からは何の應へもなかつたので、其のまゝ取つて返して、夫に斯くと告げた。

「うむ流石は天下の大善知識の一体様、動く時には動いても、執着といふものは更らにない。まるで水の流れのやうな美しいお心、それでこそ活佛様ぢや。禪家の師とはなれぬ哩。」と膝を打つて感心した。

花を見て美しいと思つて、折つて歸るは淺猿しい凡夫の心である。

##### 五 極樂の道程

大徳寺に出入りする商人の一人に、常に淨土教を信じてゐるものがあつたが、此の男見やう見真似で、坐禪だとか悟道とかを聞き嚙つて、分つたやうな風をしてゐた。一日のことであつた。一休の許へ來て、

「極樂は千萬億土と兼て承知して居りますが、禪師様は直ぐ目の前にあると仰しや。五十里や百里の違ひならば兎も角、十萬億土を眼の前、ちと違ひ過ぎまして、迷つて了ひますが、何れが本當でございませう。」と問ふた。

「迷つて見れば十萬億土、晤れば即ち眼の前ぢや。よいか、眼の前も十萬億土も吾が心一つぢや。」と一休が答へると、



「その悟るといふことが分りませぬ。」と言つた。

「分らぬといつて、こればかりは教へることの出来ぬ事ぢや。教へたら偽りぢや。

まあ、それを分らうとするには、坐禪工夫をするのぢや。よいか、それは恰度水を飲んで、あゝ冷たいと思ひ、あゝ甘いと思ふやうなものぢや。

一口に飲んだる水の味ひを

若し人間はば何とこたへん

ぢや。斯んな風に冷たい、斯のやうに甘いと話した處で分るものではない。精出して坐禪をさつしやれ。」と言はれて、其の男は暇を告げて歸つた。

「禪師様々々、分りました。」と、悦びの色に満ちた顔をして此の男が來たのは、それから恰も七日ばかり経つてからの事であつた。

「ほう、どう悟れたのぢや。」「たとへ錢金は一文も無くとも、着る着物は穢くとも、日に三度の御飯を食べられるが、極樂だと思ひますが、如何でございませう。」

一休ははたと横手を打つた。

「それぢやく、それで極樂は眼の前ぢや。その極樂に住むと思ひ、一生懸命に稼業に精を出さつしやい。必度安樂に大往生が出来る。」と言つて笑ひながら、

極樂は十萬億土はるかなり

とてものかれぬ草鞋一足

「よいか、草鞋一足で極樂へ行けると思ふのが抑もの間違ひぢや。一足の草鞋で行かれぬとしたら、扱て十萬億土とは何處かと云ふことを考へて見ねばならぬ。考へて見ると腹の空つた時飯を食ふ。眠い時には臥る。これがまつたく極樂ぢや。かう



悟つて見れば極樂は眼の前ぢや。はゝゝゝゝ。」と可々大笑した。

六 國守を懲しめる

一休が一蓋の笠、一本の杖、草の褥に石枕、行く雲を友とする東海道行脚の折であつた。濱松の宿近くへさしかかると、「下に居らう下に居らう。」の制止の聲が厳めしく聞えた。見ると向ふから金紋先箱の大名行列。それを見た一休は、今まで脱いで居た笠は急に被つた。そして往來へノコノ、現はれた。其處へ先拂ひの侍が來て、

「これく旅僧、笠を被つてはならね。それに何ぢや、往來の中央に佇立つてゐるとは、道を除けツ。」と叱りつけた。けれども一休は平然と身動きもしなかつた。侍は益々威猛高になつて詰つた。

「五月蠅い、鬨はつしやるな。」と劍突を呉れた。「己れツ、成らぬといふに分らぬかツ。」一分らぬでも宜い。拙衲の勝手ぢや。此處は天下の公道ぢや。「此の乞食坊主、言はして置けば無禮千萬、容赦はならぬツ。」と、取つて押へようとした時、駕籠の中から聲があつた。

「己れく、無禮いたすな。」と申しまして、餘りと言へば無禮千萬。」と言ふのを制めて、駕籠の中の主人は若侍に何やら囁いた。若侍は一休の側へ來て、いと叮嚀に、

「少々お伺ひ致しまするが、貴僧は豫ねて東海道御行脚と承まる、京都紫野大徳寺の一休禪師ではございませぬか。」と聞いた。一休はさうだとも、然うでないとも答へないで、澄ました顔をしてゐる處へ、駕籠の中の主人はそれへ出て來て、



「は、つ、これは、一休禪師でゐらせられますか。拙者は二階堂信濃守則重と申すものでござる。御通行とも存せず下座分れ制止のみならず家來重々の無禮、平に御容赦願ひ奉る。」と大地に手をついた。主人が平蜘蛛の様になつたので、家來たちははひらめの様になつた。一休はわざととほけた顔。

「二階堂信濃守と云はつしやるが。拙納は老碌して物忘れをしてならぬがたしか、此方は國府の國守ぢやつたな。」左様でございます。「さう判れは宜い。いやお暇さいかけて。早う行かつしやい。」有り難き仕合せ。して禪師には今宵何れへ御泊りでござりまするか。「泊りかな。元是れ一所不住の行脚僧、流るゝ水や行く雲を友として行く身ぢや。草臥れば野宿もする。運がよければ木賃宿に泊れることもあらう。拙納に構はずと、さつさと行かつしやれ。」と言ふのに、逆らふも却つて無

禮と、

「然らば御免下され、御機嫌よろしく。」と、信濃守は駕籠に入つたが、下へ下への聲は段々遠くなつた。

後見送つて居た一休は、供の鱧川新左衛門をかへり見て、

「のう新左、あれぢやから困つたものぢや。旅人の往來を暫時でも止めるといふのは不埒千萬。は……よし、一つ困らしてやらうではないか。さア、ほつくと出かけよう。」と言つて歩き出した。

やがて一休と新左衛門とが、濱松の本陣の前へ来て見ると、信濃守の定紋打つた幕を張り廻し、青竹の菱垣をしつらへ、打ち水に盛り砂、檜柱目の厚板に「二階堂信濃守御宿」と認めた建札さへあらうといふ仰々しさ。



これを見た一休は、笠も取らずに、ヅカ／＼と入つた。本陣の亭主は驚いた。

「今晚はこれ／＼で……」と言つて断はるが、一休は、「いや、今夜はどうしても此

家へ泊るのぢや。」「否え、なりません。」「否や泊まる。」の押問答、亭主は眞紅にな

つて、「しつこい乞食坊主だツ。身の程を知らないのかツ。」と押し出さうとする

つて、「は／＼／＼二階堂信濃に然う言つて呉れ。今晚は拙納も一所に泊るとな。」

一休はさう言ひながら、泥草鞋のままドシ／＼奥へ上り込んだ。新左衛門も續い

て上づた。亭主は益々躍氣となつて、

「それ、早くあの氣違ひ坊主を曳き摺り卸せ。殿様に御無禮でもしては大變だ。」と

ゴツタ返して居る。

此の物音に二階堂の家來が、ヒヨイと出て見ると一休と蜷川。

「コレ／＼亭主、粗忽いたすな。このお方は京都紫野大徳寺の一休禪師様。お伴の

方は永らく寺社奉行をお勤めになつた蜷川新川衛門様であるぞ。」と聽いて、亭主は

忽ち蒼くなつた。信濃守も聞きつけて出迎へる。

「同宿は恐れ入ります故、拙者宿替へを致しませう。」「いや／＼、それには及ばぬ。

ぢやが信濃、往來で下座令れをしたり、宿へ建札をしたりなどして、旅人を困らす

といふのは、まだ其方の身分としては早過ぎよう。拙納などは木賃宿にも泊れば、

堂宮の軒にも夜露をしのぐ。不相應な大仰山は、まづ／＼止したがよい。」と、嚴と

した一言に、信濃守面目を失ひて穴でもあらばと思つた。

其の夜は広い座敷に、一休と蜷川、信濃守と三人鼎座して、肩の凝らぬやうな世

間話に花が咲いた。旅の徒然とあつて、信濃守は終ひに一晚寝かされなかつた。



朝は信濃守、這々の體で供廻りなども感じ、

「今日から下座令れ制止は廢めちや。」と、逃ける様に滑松を出立した。

七 佛法は胸にある

或る時一休は、常州鹿島の宮に參詣した。其の折杉の木立の繁みを分けて行きかけると、行く先にニユツと立ち塞がったのは、七尺ゆたかの身の丈に、而かも筋骨逞しう、眼に爛々と光り、髯は蓬々と生え、それが雪よりも白い、見るからに儼めしい一人の山伏であつた。

「待たれよ旅僧、問答な仕らむ。」と聲をかけた。其の聲の太さ、力強さ、人の腸に應へるほどであつた。

一休は立ち停つて見まもつた、

「佛法は如何に……」と山伏は問ふた。

一休は怯びえる氣色もなく、立ちどころに、

「此處にある。」と言つて胸を叩いて見せた。

「これは異な事を承はるものかな。さらば汝の胸を割つて拜見な致さう。」

氷のやうな白刃は光つた。と同時に左の手で一休の胸元をグツと掴んだ。力にかけては一休はとても彼れの敵ではなかつた、山伏はあはや一休を一刺しにしようと思へた。けれども一休は驚かない。洒々として、聲さへ朗かに、

としごとに咲くや吉野の山さくら

木を割りて見よ花のありかを

と詠んだ。



それを聞いた山伏は、忽ち持つてゐた双をガリ投げ出して、今までの元氣は何處へ行つたか、悄然と大地へ手をついた。

「尊き御僧とも存ぜず、無禮の段は幾重にも御容赦下され。」と詫び入り、投げ出した双を拾つて鞘におさめすごとくと立ち去つた。後姿を見送つてゐた一休は、カラくと笑つた。

#### 八 糞を脱て梵天に捧ぐ

曾て蜷川新左衛門が、一休に佛法の極意を問ふた時、

佛法は鍋のさかやき石のひけ

繪に描く竹のともすれの音

と詠んだが、それでも判らぬといふので、また

夜もすがら佛の道をたづねれば

わが心にぞたづねいりける

と詠んで示した。

また地獄だ極樂だ、佛だお経だと云つて迷つて居るものがあると言つてば、作り置く罪が須彌程あるならば

閻魔の帳につけどころなし

と詠み、經卷に嚙りついて迷つてゐるものを見ては、

釋迦といふいたづらものか世にいでて

おほくの人をまよはするかな

と喝した。或ひはまた、



鬼と云ふ恐ろしきものはどこにある

邪見の人のむねにすむなり

六根につくる罪過のちりほこり

死出の山路の高根とぞなる

みな人の貪瞋ぐちの悪水は

三途の川の流れとぞなる

極楽や地獄があるとだまされて

よろこぶ人におちる人々

などを始めとして、奇抜で大悟徹底の狂歌が多く傳へられてゐる。

或ひはまた、

門松や冥途の旅の一里塚

の句や、元旦に鬮體を擔いで歩いたなどの奇行は、普ねく人の知る處である。

文明十三年の春、一休はふと病褥についた。多くの法弟や信者たちが集つて、夜の目も合はさず看護をしたが、どうも思はしくなかつた。日に日に衰へるのみであつた。

一日、一休は法弟や信者の誰彼を呼び寄せて、病褥の上に取り直つた。

「あゝ、皆の衆よく来て呉れた。拙衾もこれまで面白可笑しく世を送つて来たが、もうどうやら定命も盡きたらしい。それにお釋迦様よりも一割餘計に生きた。命あるものはほろび、咲くものは散る、これ元より定まる約束、拙衾も此の冬はお暇乞ひをするつもりぢや。就てはお前がたも、何か尋ねたい事でもあれば、今のうちに



何なりとも訊くが可い。それから呉れ呉れも言つて置くが、拙衲が死んだからと言つて、決して嘆いてはならぬ。どうか八宗九宗の人々を集めて、鐘や太鼓を叩いて踊つてお呉れ。いゝかえ、これだけは頼んで置くよ。實はな、昨夜阿彌陀如來が拙衲の處へ來られて、何時來るつもりだと問はれたから、直ぐにも行きたい。だが行つたらまた歸つて來られなからうから、いろく仕事も片づけて置きたい。もう暫く待つて貰ひたい。さうさね、此の冬の十一月二十一日には必ず行かうと約束をしたから、それではそれ迄に家を拵へて置かうと、阿彌陀如來が言つた。」と、さも暢氣な話のやうに物語つた。

一同は互ひに顔を見合せてゐたが、やがて上座の哲梅が、  
「禪師様、何を仰せられます。今、貴僧が御遷化になつては、私はじめ一同のもの

が困ります。どうか左様な事を仰せられないで、永く此の世にお留まり下さい。」と早や兩川には涙の露。それに續いて竺齋、または紅甚など七十の坂を越えた老人が、眼に涙して同じやうな事を言つて口説いた。一休はカラ／＼と笑つた。

「これ／＼、さう云ふ事を言ふものではない。谷川に流るゝ水よりも疾く遷るのが此の娑婆ぢや。よいか、世は悉く無常ぢや。拙衲が今までの間に爲たこと、言ふた事を、前等がよく守つて行つて呉れたら、拙衲はお前等と何時までも此の世に居るといふものぢや。」と懇々と諭した。

斯うして一休は、文明十三年十一月二十一日、年八十八を以て遷化したのであるが、其の辭世に曰く、

朦朦然而四十年。

淡淡然而四十年。



朦朦淡淡八十年  
末後脱屎棒梵天

喝

柳不緑  
花不紅

と。また

かり置きし五つの物を四つかへし

本來空に今ぞもとづく

本來もなきいにしへの我なれば

死にゆくかたも何もかもなし

はじめなくをばりもなきにわがこころ

うまれ死するも空の空なり

國いづくさとはいかにと人とはば

本來無爲のものとはこたへよ

と詠んだ。そしてまた、遺言状の奥には、

「我れ死して百年過ぎて後、唐土より禪師來らば我が再來と思へ、又二百年に當る年、我が屍を土より掘り出して見るべし、若し形朽ちなば、云ひ置きし語は火中すべし。大方、死骸はそこねまじ……。」

と書いてあつたが、一休の死後百年後は、恰かも天下は麻の如く亂れた天正年中で、信長が光秀のために本能寺に討たれた頃で、唐土からは禪師は來なかつた。

其の後七十有餘年、徳川三代將軍家光が薨去してから四年目に、黄檗の開祖隱元が歸化して、禪風は一時に天下を風靡した。そこで此の禪師こそ一休の再來である



と傳へられた。

一休が死後二百年と云へは、恰かも寛文十年に當るが、誰も一休の遺言通りに死骸を掘り出して見たものもなかつたので、朽ちて居たかどうかは判らない。

尙ほ一休は、狂雲子、夢閨、驥驢、國景などの號があつて、書畫を能くしたが、就中花鳥山水人物などは、粗野なところにまた言ふに言はれぬ情趣があり、梅樹、岩、蘭などもなか／＼巧みであつた。

## 賣茶翁

一 只より負け申さず

京は東山の畔に、通仙亭といふ簡素な茶店があつた。其の茶席に、

茶錢は黄金百益より半文錢迄は呉れ次第、たゞのみも勝手、たゞよりはまけまをさす。

摩訶へおあしで渡る難波江の

流れを汲める老のわが身ぞ

といふやうな事が認めてあつて、側には竹の錢筒か掛けてあつて、茶代は客の投げ込むに任せた。そして其の錢筒には、



隨處開茶店ずいじょくわいぢやてん

一鍾是一錢いつしゆんはいつせん

生涯唯箇裏しやうがいはただこのうち

飢飽任天然うちはたはてんれんにまかす

といふ様な偈が、幾らも彫りつけてあつた。

此の變つた、そして簡素な茶店の主人こそ、實に賣茶翁だつたのだ。

通仙亭で用ひる茶具は十八種、みな當時の有名な文人或ひは高僧などが題したもののばかりで、此の十八種の茶具をひつくるめて仙槩と名づけてゐた。春は東山、秋は通天の紅葉、あるひは大佛の燕子花池など、時折々の眺めを賞でて多くの人々が集る處へは、此の仙槩を擔いで行つて、席を設けて客を待つのであつた。洛中の風流人は、翁の松風を慕ふて、折り焚く柴の煙に集るところから、誰れ言ふとなく「賣茶翁」と呼び、其の名はあまねく傳はつた。そして此の賣茶翁の一碗を啜らぬも

のは、風流に嘴を入れる資格がないとまでされた。

賣茶翁は、肥前蓮池に生れ、俗姓は柴山氏、十一歳の時、龍津寺の化霖和尚に隨ふて得度し、法名を元昭、字を圓海とつけられた。化霖は宇治の黃壁山獨湛禪師の弟子であつたところから、或る時連れられて黃壁にのほつた。すると禪師は、圓海を一目見て、早くも其の奇才を見抜いた。そして親しく方丈に召して偈を授けた。大徳の禪師が、而かも取るにも足らぬ小坊主に、さうした扱ひをするといふことは殆んど絶無といつても好い位であるから、圓海は非常に感奮した。それから歸山して十年といふものは、寺門を出ないで専心修行したが、二十二の年に、偶と痢を患つて非常に苦しんだ。

「あゝ、我ながら愛想が盡きた。我が五體の苦しみすら忘れる事の出来ぬ身で、心



の惱みからどうして脱れることが能ようぞ。まだまだ修行が足りぬ。」  
 斯く叫んで發憤した圓海は、まだ病ひが本復しないのに、一笠一杖、行く雲と流るゝ水を友として、行脚の旅にのほつた。

圓海は先づ奥州に赴き、満壽の月耕和尚の許で數年間修行した後、去つて諸方を遍歴して、曹洞、臨濟派の耆宿を訪ね、或ひは湛堂律師について戒律を受け、東西其の跡を止めず、身には一錢の蓄へもなく、只管修行に努め、再び九州に舞ひ戻つた上、筑前の雷山に籠つて、一切火食を斷つて結伽練行して一夏を過した。

「昔者世奇首座、龍門の分座を辭する時、是猶金針の眼を刺すが如きか、龍髪も若し差へば、ひとみ則ち破る、如かじ生々學地にゐり、自ら練らんには、といはれた。俺も常に之を以て自分の警とし、もし能く此の拳頭一つで、萬物に觸れる事が能る

様にでもなつたらいざ知らず、さなくて僅かの學問を飾り、宗匠顔をするなどとはまことに恥かしい事ぢや。」とは、口癖のやうに言つて居つた事であつた。

其の後龍津寺に歸つて、師に仕へて十四年、師の入寂と共に「沙門の道は心ぢや、行蹟ではない。袈裟の徳に誇つて人の布施を煩はす事は俺の志ではない。」と言つて、寺を法弟の大漸に譲つて、己れは飄然と京にのほつた。そして東山の畔に茶店を開いたのだつた。

## 二 窮樂と賣茶

「賣茶翁、おうちかな。」と言ひつゝ、或時賣茶翁を訪れたのは、其の頃書家として有名な龜田窮樂であつた。窮樂は賣茶翁とはつい近所に住んで居つた。治體物を物とも思はぬやうな豪放な男だが、賣茶翁とは最も親しくしてゐた。



「おゝ窮樂どのか、ようござつた。一服たてて進じようか。」「いや、俺には例によつて茶は禁物ぢや、酒を持参した。」「は、は、は、左様か、では爛をして進ぜよう、此方は酒に醒めなされ、俺は茶に酔ひませう。」「はあつは、はあつは、はあつは、相變らず面白い事を云はつしやる。」

それから窮樂は持参した酒、賣茶翁は手だての茶を飲んで、四方山の話に耽つた。賣茶翁と窮樂はよほど仲が好かつたと見えて、或る時は氣輕な賣茶翁の事だから、窮樂のために酒を買ひに行つてやつた事もあつた。

賣茶翁が双丘の東に轉居した當時、梅雨が長く降りつづいて、店には茶を飲む客も絶えてなかつたので、錢筒は空になつてしまひ、米も買ふ事も出来ない事があつた。窮樂はそれを聞くと、早速駆けつけて賣茶翁の急を救ふた事もあつた。

蕉中私尙、夜雨私尙を初めとして、當時の名僧知識で、賣茶翁と交はらぬものはなかつた。また池大雅、太田見良なども親しく往來して、見良の如きは、

「翁が茶を賣らば、われは藥を賣らん。」などと戯むれた事もあつた。

當時肥前の掟として、疆を出る者は、必ず手形を持たなければならず、沙門が諸國に行脚するにも、必ず十年目に歸つて、更めて許しを受けなければならぬ事になつて居たので、賣茶翁はそれが煩くて堪らなかつたので、恰度七十歳の時に歸つた時、藩に乞ふて出家を罷め、京にある同郷の官人の隸屬といふ名義で、十年の期限を免して貰ふことを願つた。藩の有司とても、翁の爲人を信じて居るので、翁の此の願ひは事なく聽許されたから、翁は大いに悦び、それから性は高と名乗り、遊外居士と號して、再び京にのほり、庵を岡崎に結んで、幻々庵と名づけた。



賣茶翁が茶を賣るのは、唯た茶を賣るのみではなかつた。寧ろ茶は看板で、茶のうち己の禪機を養はうとするのだつた。それで交はる禪僧などの中にも、其の爲人を慕ふのあまり、只管茶を弄んで、それを以て風流とするものも尠くなかつたが、翁はこれ等に對して、左の一偈を賦してその警めとした。

太傳面前翻却去。

千年舊案舉來新。

腕頭無力全扶起。

漫叫賣茶莫失真。

### 三 愛用の茶道具を焼く

賣茶翁は八十一の年を迎へた。もう仙策を擔ぐ力も無くなつた。

「老ひさらばうた俺には、もうこれも用はない。」

さういつて、翁は三十年來我が子の様に愛用して來た種々の茶道具を、幻々庵の

庭に積み重ねて、老眼にじつと打ち眺めた。

「ああ、思へばお前たちとも長い馴染であつた。もう俺にはお前たちが不用になつた。ぢやが愈々今日別れるかと思ふと、道がに名残惜しい。いや／＼、これもお前達の爲めぢや。老いさらばうた俺の身體、追つけ同じ道を行かうぞ。」

賣茶翁は、後に心の残らぬやうに、愛用して來た茶道具に火をかけて、灰にして了はうと決心したのだつた。それはちやうど翁が八十一歳の秋、即ち寶曆五年九月四日のことであつた。

「我從來孤貧にして立地なし、汝吾を輔佐する事曾て年あり、或ひは春山秋水に伴ひ、或ひは松下竹陰に響く、故を以て飯錢缺くる事なく、八十餘歳を保ち得たり、今已に老邁にして、汝を用ふるに力なし、北斗に身を藏して、將た天年



を終へむとす、却後或ひは世俗の手に汝を辱められて、恐らくは遺恨あらん、是を以て汝を賞するに火聚三昧を以てす、直下火焰裡に向ひて轉身し去れ、轉身の一句且如何。」

茶翁は斯く言ひ終ると、網代に組んだ茶道具に火をつけた。やがて火はめらめらと燃え移つた。それを眺めた翁は、

却火洞然毫未盡。

青山依舊白雲中。

と一喝した。

其の後は門を閉ぢて客にも會はなかつた。さうして餘生を養ふたが、而かも一山の首座とも仰がれる身でありながら、修行した道を棄て、草の庵に朽ち行くのは惜しいものだといふものがあると、翁は筆をとつて、

笛吹かす太鼓叩かす獅子舞の

後足となる胸のやすさよ

と認めて示した。

翁が門を閉ぢて、客を辭してもしばらくと云ふものは、訪ふものが引きも切らなかつた。止むなく會はねばならぬ事もあつた。それが翁には煩はしかつたので、座席の傍らに壁に「長咄しいや」と認めて貼つて置いた。さうしていよく老が窮まるに及んでは、絶對に辭して會はなかつた。

賣茶翁は、茶道具に別れてから八年、即ち寶曆十三年七月十六日八十九歳の高齡を保つて、三十三間堂の南、幻々庵に眠るが如く大往生を遂げた。翁の筆蹟は美事で、茶人間には頗る珍重された。



## 十返舎一九

## 一 「膝栗毛」で名盛を馳す

十返舎一九と云へば、戯作膝栗毛の著者として、兒童と雖も其の名を知つて居るほど膾炙して居る。一九は本名を重田貞一、幼名を幾次郎と云つたが、志野流の香を嗜んだ處から、黄熟香の十返に因んで舎號とし、幼名の幾と國音の通するので即ち一九と呼んだ。また醉齋とも號した。

一九の父は鞭助と稱して、駿府の一小吏であつた。父の歿後は其の跡を繼いだか、性來極めて磊落で、常に飄きんな事を言つては、他を笑はしめて居た。けれども酒を飲むに至つて癖は悪い方で、誰彼の差別なく、片つ端から罵倒するので、勿論上

役などには受けがよくなかつた。

尤も、自分としても屬吏で一生を終らふなどと云ふ考へは毛頭なかつた。仍で幾干もない職を弟義十に譲つて、飄然と大阪に出た。さうして淨瑠璃作者の中に伍つて、近松與七と呼んで居だが、此處でも面白くなかつた。それで今度は江戸に下つた。それは寛政六年の頃で、一九は漸く二十一歳であつた。

江戸に出た一九は、並木千流、若竹百躬と合作で「木下蔭狭合戦」などを著はしたが、それは先輩との合作であるから、勿論一九は助手を勤めた位に過ぎなかつた。

一九が一躍其の名を揚げたのは、享和二年に書き出した、彼の「道中膝栗毛」からであつた。



一九が「膝栗毛」を書く時は、あらゆる書物は其處らに雑然と取り散らされ、寢床は敷きつ放し、酒利が其處に列んでゐる。まつたく足の踏み場も無いほどの中に陣取つて、一切家人を入れなかつたといふ。

一九曾て珍らしくも朝早起きして見ると、残月はあたかも晝のやうであつたので行くともなしに日本橋まで歩いて來たが、晴れ渡つた空の彼方には、繪の様な富士山が見える。急に遊興を覺えたので、家人にも告げず、飄然と身體一つ旅途にのほつて、京都、大阪に三月ほど遊んで、またふらりと戻つて來た。處が歸つて見ると、自分の室は以前の通りに、雜然と取り亂したままで、寢床も敷きつ放しである。當時の「膝栗毛」の好評は素晴らしいもので、一篇が世に出る毎に、遠近相争つて之れを購つたといふのでも、如何に人氣を煽つたかと云ふことが知れる。

## 二、蜀山人と一九

一日のことであつた。一九は當時狂歌で名を知られてゐた、駿河臺の蜀山人の家へぶらりと訪れた。

「先生は御在宿でけすか。」「何方様で？」「手前は十返舎一九と申す者でけすが、御高名を慕つてお訪ね申しやしたから、どうか宜敷くお取り次ぎを願ひやす。」「あゝ左様で、ではどうか暫らくお待ち下さいまし。」と、取次ぎのものは奥へ入つて行つたが、間もなく出て來て、「どうぞお上り下さい。」と、叮嚀に一室に案内した。

「主人は只今、ちよつと手放し兼ねる用事を致して居りますから、どうか失禮でございませうが、暫らくこれで御待ち下さい。」「なに、どうせ遊んで居りやすから、御緩くりと御用を御濟しなさる様、お傳へ下さいまし。」



一向構はない一九だが、初めての見参の家のことであるから、珍らしくも畏まつて待つてゐた。待つた待つた。もう小半刻も経つ。冷たくなつた茶も飲み干したが蜀山人姿も見せぬ。其のうちに酔が醒めて、酔醒めの水が欲しくなつたが、まさか初めて来た家で、手を鳴らして家人を呼ぶ譯にも往かない。

むしやくしやくして来るのを、じつと我慢して居たが、もうやり切れなくなつて、持ち前の疔癩玉を破裂させた。

「何だつ、南敵だの蜀山だのと、ちつとばかり人から煽てられりやア、好い氣になりやがつて、増長するにも程がある。多寡の知れた貧乏御家人ぢやアねえか、馬鹿々々しい、先生が聞いて呆れらア。」と、ありつたけの毒口を吐いて、フイと起つて疊觸りも荒々しく、其の儘歸つて了つた。

一九は家に歸ると、何時も寂床は敷きつ放し、散らかし放題の自分の書齋に入つて、ガブ／＼酒を飲んだ。水も鱈腹飲んだ。それでもまたムシヤクシヤが治らなかつた。

「畜生つ、馬鹿にしてやがる。他を侮りやがつて、何だ南敵が……。」  
餘憤は酒徳利に飛ぶ、机の上に飛ぶした。其の後或る時であつた。参會の席でゆくりなくも蜀山人に逢つた。何時ぞやの不埒を取つちめてやるのは此の時だと思つた。

「初めてお目にかかりやす。手前が一九といふ詰らねえものでけすが、いくら詰らねえ手前だからつて、あんまり馬鹿にしちやア困りやすぜ。」

まだ餘憤が晴れてゐない一九、而かも酒を飲むと眼を据えて、相手構はず毒つく



一九が、蜀山人の前にグツと詰めよつた。今にも掴みかかりさうな權幕で、蜀山人はニコ／＼笑ひながら、

「貴公が十返舎か、何を俺が馬鹿したかな。貴公こそ俺のやうな老人を黽りものにして置いて。」「これは面白い。何時手前を黽りものにしやしたか？ 折角訪ねて往つたものに、待ち呆けを食はすなんかア、誰が聞いたつで馬鹿にしてるとしきやア思はれませぬえ。」「いや／＼、不足を言ふのは此方のことだ。俺の方ではまた、貴公の名前を疾から聞いてゐるので、一遍會ひたいものだと思つてゐるところへ、貴公が訪ねて来て呉れた。いやそれは忝けない。それでは悠悠飲みながら話しをしやうと思つて、懐をさぐつて見ると、お恥かしい話だが、御存じの貧乏御家人、牛僧囊中無一物だつた。は／＼／＼。」

一九の怒つてゐた肩は、段々落ち下がつて來た。蜀山人は杯を差しながら、「ところでだ。思ひついたのは俺の家の庭に一本の桐の樹があつて、それが大分大きくなつて居たので、近所の下駄屋から、度々賣れとせがまれて居た。それを偶と思ひ出したので、これを一つ賣り飛ばして、幾らかの金にした上と思つて下駄屋を呼んで賣り飛ばして、酒を買はしてちよつとした肴も用意して、さて客人はといふと、それほどまでにして會ひたいと思つてゐた貴公の姿が見えないといふ。これだから若いものは困る。あんまり氣が早過ぎる。仕方がないから買つて來た酒は一人で飲んで了つた。それが爲めに桐の樹一本不意にしたことを思へば、まあ貴公に黽られたとしか思はれまいて……は／＼／＼。」

これには遺がの一九も言葉がなかつた。己れの無禮を詫びて、茲に兩人は打ち解



けたが、其の後一九は蜀山人のことを、先生々と呼んでゐた。兩人の仲は日を逐ふて親密になつて行つた。

### 三 債鬼拂ひの狂歌

一九は「膝栗毛」を書き出してから、金も随分入つた。然し些しも身にはつかかなかつた。何時も財布は空であつた。

或る年の暮れ、毎日酒屋が来る、米屋が来る、薪屋が来る、魚屋が来る。五月蠅くてたまらなかつた。此の調子では、切齒つまつた大晦日には、何處へか逃げ出しでもしなければ遣り切れないと思つてゐた。

いよいよ大晦日になつた。一九は家を外さうと、今鬨を跨いだところへ、遣つて来たのは家主の吉兵衛。

「先生お出かけかな」「うむ、ちよつと。」「今日は是非お願ひいたしたいんですが。」「うむ、それだからこれからその何だ。工面に出かけるところだ。」「お金の工面とおつしやつて、何方へお出かけになるんです。ははア分つた。其慶事を言つて、吉原へでも行つて、潜つて居ようといふ方寸なんでけせう。」「そんな卑怯なことをする一九ぢやない。」「ぢやア何方に工面にお出かけになるか知れませんが、御一緒に参りませう。」「さうか、だが何處といつて當は無い。」「御冗談仰しやつちや不可ませんよ。當のない工面が出来ますね。」「いや、満更ら當がない事も無い。」「ぢやア御一緒に参りませう。」「然うか、ぢやお前も手傳つて呉れ。」「手傳つて呉れつて、一體何處に行つて、何をするんでけす?」「何處といふ當もないが、今日はお前たち見たいに、掛を取つてあるくものが何の位あるか知れない。」「然うですと



も、それも先生見たいな金拂ひの悪い人が多からですよ。表を歩いてるものは大抵掛取りですよ。」「それ見い。だから多勢のうちには呆然した奴が居つて、金を落す奴があるに違ひない。それを見つけて歩くのだ。」「なんだ馬鹿々々しい、眼を廻すやうな大晦日だつてのに、そんな呑気な事がして居られますか。先生の處さへ何とか形をつけて下さりやア、あとはもう大概済むたんですから、自身番に詰めなきやなりません。番屋に行つて將棋でも差しながら、春を迎へようといふ方です。ございませから、一つ何とか御都合を願ひますよ。」「拂はねばならぬ金だから、拂ふには拂ふが、今は無いよ。」「御冗談でけせう。そんな辯解は今日は通りませんよ。」「いや、そりや分つてるが、何も俺の店賃を取らなけりやア、春が迎へられないといふ様なお前でもあるまい。そりやア俺だつて氣持よく拂つてやり度い。拂

つてやりたいが何しろこれだ。」と言ひながら、一九は机の上の筆をとつて、白紙にさら／＼と書いて投げ出した。吉兵衛手にとつて見ると、

歩桂氣に王手わた飛車火の車

金銀にさしせまる香(今日)

とあつた。

「なるほどねえ。逸がはうまいもんだな。歩桂氣にも好いが、わた飛車も面白い。金銀にさしせまる香か、は／＼／＼。」

吉兵衛つく／＼感心して、家賃の催促に來たのも忘れたかの如く、笑ひながら歸つてしまつた。

四、賀客の禮服で廻禮